

2018年度

大学院シラバス

国際言語文化研究科

摂南大学大学院

国際言語文化研究科

Graduate School of International Languages and Cultures

国際言語文化専攻

Division of International Languages and Cultures

国際言語文化研究科の教育目標とカリキュラム編成方針

国際化の潮流はますます加速し、政治・経済・文化・情報など、社会のあらゆる面で国際的な相互依存関係が強まっています。わが国の社会や文化もグローバルな共生の世界を志向する時代に入ってきました。

また一方では、世界各地で戦争や紛争が後を絶たず、さまざまな悲劇を生んでいます。さらに環境問題、経済問題など多くの問題が世界的規模で拡大しています。今やわれわれは、これらの諸問題と否応なく直面せざるを得ない状況となっており、国際社会においてわが国が果たすべき役割はますます高まりつつあります。

国際言語文化研究科においては、このような状況を踏まえ、国際化がもたらす複雑な諸問題の解決に貢献できる人材の育成を目指します。具体的には、欧米とアジアに重点を置き、その言語と文化を深く学びます。

教育課程は、「欧米言語文化研究領域」と「アジア言語文化研究領域」の2研究領域、および共通授業科目で構成され、さらに、それぞれの研究領域は、言語文化特論科目群と地域文化特論科目群、総合演習科目群からなっています。また、共通授業科目には、専門外国語能力を涵養する「上級英語」「上級中国語」「上級スペイン語」「上級インドネシア・マレー語」を含んでいます。

とくに本研究科においては、一つの研究領域における高度な学習と主体的な研究を通して専門性を深めるとともに、他研究領域の科目も広く履修することによって、複眼的かつ学際的な視点を養うことを主眼としています。

【履修方法】

学生は、専攻する研究領域の指導教員から、履修および研究についての指導を受けるものとする。

1. 選択した研究領域の「総合演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ（論文指導を含む）」4科目8単位を必修とする。
2. 選択した研究領域の授業科目の中から、当該指導教員が担当する授業科目（特論）を含む6科目12単位以上を選択必修とする。
3. 他の研究領域の選択科目から、2科目4単位以上を選択必修とする。
4. 共通科目の中から、「上級英語Ⅰ・Ⅱ」「上級中国語Ⅰ・Ⅱ」「上級スペインⅠ・Ⅱ」「上級インドネシア・マレー語Ⅰ・Ⅱ」のいずれか2科目2単位を含む4科目6単位以上を選択必修とする。

ただし、①研究科長が認めた場合は、他研究科の授業科目を履修しその修得単位を共通科目の単位数に含めることができる。ただし、最大4単位までとする。

- ②外国人留学生については、「上級英語Ⅰ・Ⅱ」「上級中国語Ⅰ・Ⅱ」「上級スペインⅠ・Ⅱ」「上級インドネシア・マレー語Ⅰ・Ⅱ」を「アジア言語文化特論ⅥA・ⅥB」に読み替えることができる。

授業(指導)計画の記載内容の凡例

授業(指導)計画は、以下の項目に沿って記載しています。

1. 科目名等 全授業(指導)科目名に英文名を併記した。
対象となる年次、開講学期、単位数、担当者の氏名を順に記載した。
2. 授業(指導)概要・目的 授業(指導)全体の概要、各研究科の教育目的に基づいた位置付け
を記載した。
3. 到達目標 授業(指導)の目的とする到達目標について、できるだけ具体的に記
載した。
4. 指導方法と留意点 授業の進め方や予習・復習の指示、課題やレポートの指示等を記載
した。
5. 授業(指導)計画 授業(指導)内容が分かるように、原則として授業(指導)テーマ、内容
・方法等を記載した。
6. 事前・事後学習課題 授業時間外における学習(予習・復習)内容が分かるように、できるだ
け具体的に記載した。
7. 評価基準 成績評価の方法について、できるだけ具体的に記載した。
8. 教材等 授業(指導)で使用する教材について記載した。

目次

英米言語文化特論ⅠA・ⅠB	1
英米言語文化特論ⅡA・ⅡB	2
英米言語文化特論ⅢA・ⅢB	2～3
英米言語文化特論ⅤA・ⅤB	3
英米言語文化特論ⅦA・ⅦB	4
英米言語文化特論ⅧA・ⅧB	5
欧米地域文化特論ⅠA・ⅠB	6
欧米地域文化特論ⅡA・ⅡB	6～7
欧米地域文化特論ⅢA・ⅢB	7
欧米地域文化特論ⅣA・ⅣB	8
欧米言語文化研究総合演習Ⅰ～Ⅳ	8～21
アジア言語文化特論ⅠA・ⅠB	21
アジア言語文化特論ⅡA・ⅡB	21～22
アジア言語文化特論ⅢA・ⅢB	22
アジア言語文化特論ⅣA・ⅣB	23
アジア言語文化特論ⅤA・ⅤB	23～24
アジア言語文化特論ⅥA・ⅥB	24
アジア地域文化特論ⅠA・ⅠB	25
アジア地域文化特論ⅡA・ⅡB	26
アジア地域文化特論ⅢA・ⅢB	27
アジア地域文化特論ⅣA・ⅣB	28
アジア地域文化特論ⅤA・ⅤB	29
アジア言語文化研究総合演習Ⅰ～Ⅳ	29～35
上級英語Ⅰ・Ⅱ	36～37
上級中国語Ⅰ・Ⅱ	37～38
上級スペイン語Ⅰ・Ⅱ	38
上級インドネシア・マレー語Ⅰ・Ⅱ	39～40
国際政治特論Ⅰ・Ⅱ	40～41
国際経済特論Ⅰ・Ⅱ	41
異文化理解Ⅰ・Ⅱ	42～47

科目名	英米言語文化特論 I A	科目名 (英文)	Topics in English Language and Cultures IA
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	西川 眞由美

授業 (指導) 概要・目的	この授業では、丁寧さ(politeness)や敬意表現、またメタファー(metaphor)やアイロニー(irony)など、語用論に関するさまざまな言語現象に関して、関連する理論を使用し、状況に応じたコミュニケーション (主に言語伝達) を多様な側面から分析し研究する。前半は語用論に関する主な論文を読み進め、理論自体の理解を深める。 後半は、具体的な言語使用例を集め、それらを詳しく分析することにより、なぜ話し手はその状況でその発話を使うのか?聞き手はどのようにしてその発話を解釈するのか?さらに、その発話によって何が伝えられるのかを考察する。敬意表現やポライトネスなど社会的・文化的側面や対人関係的な側面などにも着目しながら、効果的なコミュニケーションのとり方を追求する。
到達目標	日常使っている言語表現の中で、興味深い表現を見つけ、なぜそのような表現が使われるのかについて考える。そのうえで、言語学、特に語用論やコミュニケーションの基礎となる概念や枠組みを理解する力、英語で言語学の論文を読みこなす力、さらに物事を論理的に思考する力を養い、言語表現が何をどのように伝えるのかを詳しく分析し考察する力を養うこと、などを目標とする。 さらに、なぜ国や文化によってコミュニケーションの取り方が異なるのかなどについても、広くリサーチを行い、国際的な理解を深めることも目標とする。
授業方法と留意点	授業では、英語と日本語の多くの文献を読むので、必ず予習をして授業に臨むこと。 授業は、主に下記の項目に沿って行う。
授業 (指導) 計画	(1) 語用論・コミュニケーションとは (2) さまざまな語用論・コミュニケーションの理論 (3) 発話解釈と認知能力 (4) コミュニケーションにおける労力と効果 (5) 発話の含意 (6) 敬意表現やポライトネス (6) レトリック
事前・事後学習課題	各回して教材をあらかじめ読み、要点を整理しておくこと。また授業終了後、自分の考えをまとめ、中間および期末レポートの作成に備えること (合計30時間)。中間および期末レポートの作成 (合計30時間)
評価基準	平常点 40%、予習・課題 30%、 レポート 30%
教材等	適宜プリント配布
備考	

科目名	英米言語文化特論 I B	科目名 (英文)	Topics in English Language and Cultures IB
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	西川 眞由美

授業 (指導) 概要・目的	この授業では、語用論・コミュニケーションに関するさまざまな理論を使用し、状況に応じたコミュニケーション (おもに言語伝達) を多様な側面から分析し研究する。英米言語文化特論 I A (語用論・英語コミュニケーション) 同様、語用論・コミュニケーションに関するさまざまな理論を使って、含意(implication)、間接表現(indirect expression)、丁寧さ(politeness)、敬意表現、レトリック (メタファー、アイロニー、誇張など)、談話標識(discourse marker)などがどのように解釈されるのか、またそれらを使ってコミュニケーションを行うことによってどのような効果が得られるのかを考察する。
到達目標	言語学、特に語用論の基礎となる概念や枠組みを理解すること、英語で言語学の論文を読みこなす力、さらに物事を論理的に思考する力を養うこと、言語表現が何を伝えるのかを考察することを目標とする。
授業方法と留意点	授業では、英語と日本語の多くの文献を読むので、必ず予習をして授業に臨むこと。 授業は、基本的に下記の項目に沿って行う。
授業 (指導) 計画	(1) 間接表現(indirect expression)と含意(implication) (2) 丁寧さ(politeness)と敬意表現 (3) レトリック表現の解釈と効果 (4) 談話標識 (discourse marker)の意味と機能 など
事前・事後学習課題	各回の指定教材をあらかじめ読み、要点を整理しておくこと。また、授業終了後、自分の考えをまとめ、中間および期末レポートの作成に備えること (合計30時間)。中間レポートおよび期末レポートの作成 (合計30時間)。
評価基準	平常点 40%、予習・課題 30%、 レポート 30%
教材等	適宜プリント配布
備考	

科目名	英米言語文化特論ⅡA	科目名(英文)	Topics in English Language and Cultures IIA
配当年次	1年	単位数	2
学期(開講期)	前期	授業担当者	杉浦 秀行

授業(指導)概要・目的	米国の社会学者 Harvey Sacks たちによって創始された会話分析 (Conversation Analysis) の方法論を取り上げる。本講義では、会話分析の基本的な考え方・精神、会話データの収集方法や書き起こし方法、実際に分析を行っていく際の手続き、分析方法について理解を深めることを目的とする。
到達目標	・会話分析の基本的な考え方・精神、データ収集方法や書き起こし方法、分析の手続き、分析方法を理解する ・会話分析の方法論に基づき、相互行為的な視点をもって、実際の会話データを使い、基本的な構造を分析できるようになる
授業方法と留意点	授業では、講義と演習(実際のデータを見ながら講義で取り上げられた現象を分析し、議論する)を交えて進めていきます。また、教科書の指定範囲について、要旨をまとめ発表してもらう機会を設けます。講義内容に関連する英語論文も必要に応じて取り上げます。
授業(指導)計画	本講義では以下の順番・内容で進めていく 1. 会話分析の視点と研究プロセス 2. 発話の順番交替組織についての講義と演習(データ分析) 3. 発話の修復に係る組織についての講義と演習(データ分析) また、受講者の興味・関心に応じて、他のトピックについても適宜取り上げる
事前・事後学習課題	・指定教科書を事前に読んだり、授業後に読む ・データ分析の課題に取り組んでもらいます
評価基準	期末レポート: 50% 課題: 30% 授業参加度(ディスカッション・発表を含む): 20%
教材等	教科書: 「会話分析基本論集」 H. サックス他著(西坂仰 訳) 世界思想社 参考書: 「会話分析入門」 串田秀也他著 勁草書房
備考	

科目名	英米言語文化特論ⅡB	科目名(英文)	Topics in English Language and Cultures IIB
配当年次	1年	単位数	2
学期(開講期)	後期	授業担当者	吉村 征洋

授業(指導)概要・目的	初期近代イギリス演劇を射程とし、特にシェイクスピア演劇に関する理論を学ぶ。
到達目標	様々なドラマ作品に触れることで、受講者のドラマ・リテラシーを涵養する。
授業方法と留意点	ルネサンス初期当時の様々な戯曲を原作で精読し、その作品に関連する書籍・論文等を参照しながら、作品論について考察および議論を行う。
授業(指導)計画	第1回-第15回 受講者の関心に合わせながら、ドラマ作品の選定、作品読解を行う。
事前・事後学習課題	取り上げる作品に関する情報を収集する。
評価基準	プレゼンテーション 20% レポート 80%
教材等	授業時に指示する
備考	

科目名	英米言語文化特論ⅢA	科目名(英文)	Topics in English Language and Cultures IIIA
配当年次	1年	単位数	2
学期(開講期)	前期	授業担当者	住吉 誠

授業(指導)概要・目的	現代英語の変化する姿を、実際のデータにもとづいて調査し、そのような変化がなぜ起っているのかについて考えていく。現在の英語の姿は、歴史的な変化の積み重ねであるが、それぞれの変化には相応の理由がある。そのような理由を探る。また、現在の英語の姿をいかに辞書の記述に反映するかなどもふくめて、何をどのようにどこまで辞書の記述として掲載するべきかなどについて、辞書学の知見を踏まえて検討・議論する。
到達目標	英語で書かれた英語学の文献を読み解く能力を身につける。 実際のデータをもとに、現代英語の在り様を考えることができるようになる。 自らが発見したデータに自分なりのやり方で説明ができるようになる。
授業方法と留意点	文法書や研究書の抜粋を読み、そこに書かれている記述について討論をする。文法書の記述に反するような例を見つけて、どのような点が問題となるのかといったことについて、プレゼンテーションをする。
授業(指導)計画	第1回目: オリエンテーション 第2回目-第15回目: Quirk et al. (1985), Huddleston & Pullum (2001) などをはじめとする英語の文法書や、現代英語の語法を扱った論文の抜粋を読む。合わせて、自分で用例を収集し、辞書や文献の記述と比較検討を行い、問題点を探っていく。教員との討議を中心に授業を進める。
事前・事後学習課題	毎回の配布教材を読み込み、内容をして、授業での発表に備えること。事後の学習では、英字新聞やペーパーバックなどに使用されている、興味深い英語の表現や文法事項を収集し、期末レポートの作成を行う。 事前事後の資料の読み込み、プレゼンテーションの準備、レポートの作成などにかかる総時間数を30時間以上とする。
評価基準	授業中のプレゼンテーション(50%) 期末レポート(50%)
教材等	授業中に指示する。
備考	

科目名	英米言語文化特論Ⅲ B	科目名 (英文)	Topics in English Language and Cultures IIIB
配当年次	1 年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	住吉 誠

授業 (指導) 概要・目的	現代英語の変化する姿を、実際のデータにもとづいて調査し、そのような変化がなぜ起こっているのかについて考えていく。現在の英語の姿は、歴史的な変化の積み重ねであるが、それぞれの変化には相応の理由がある。そのような理由を探る。また、現在の英語の姿をいかに辞書の記述に反映するかなどもふくめて、何をどのようにどこまで辞書の記述として掲載すべきかなどについて、辞書学の知見を踏まえて検討・議論する。
到達目標	英語で書かれた英語学の文献を読み解く能力を身につける。 実際のデータをもとに、現代英語の在り様を考えることができるようになる。 自らが発見したデータに自分なりのやり方で説明ができるようになる。
授業方法と留意点	文法書や研究書の抜粋を読み、そこに書かれている記述について討論をする。文法書の記述に反するような例を見つけて、どのような点が問題となるのかといったことについて、プレゼンテーションをする。 後期は特に辞書の記述との比較を中心に行う。
授業 (指導) 計画	第 1 回目：オリエンテーション 第 2 回目～第 15 回目：辞書学の論文の抜粋を読みながら、日本人にとっての辞書とはいかにあるべきか、また、そのような記述は海外で出版される英英辞典を含めた英語の辞書にどのような貢献ができるのかを考える。辞書記述を実際の英語の姿と比較し、辞書記述の妥当性を考えていく。担当教員との討論を中心に進める。
事前・事後学習課題	毎回の配布教材を読み込み、内容をして、授業での発表に備えること。事後の学習では、英字新聞やペーパーバックなどに使用されている、興味深い英語の表現や文法事項を収集し、期末レポートの作成を行う。 事前事後の資料の読み込み、プレゼンテーションの準備、レポートの作成などにかかる総時間数を 30 時間以上とする。
評価基準	授業中のプレゼンテーション (50%) 期末レポート (50%)
教材等	授業中に指示する。
備考	

科目名	英米言語文化特論Ⅴ A	科目名 (英文)	Topics in English Language and Cultures VA
配当年次	1 年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	鳥居 祐介

授業 (指導) 概要・目的	アメリカ研究(American Studies)の主要な理論と実践について学ぶ。アメリカ合衆国の人種、階級、ジェンダーに焦点をあてた学際研究分野がどのように発達し、変化しつつあるのかを、研究の実例を読み、討議することを通じて理解する。研究の実例は 20 世紀のアメリカ文化史、とりわけ大衆文化(Popular Culture)を対象としたものから受講生の関心に応じて選ぶ。
到達目標	英語圏の文化研究の問題意識と用語に親しみ、特にアメリカ合衆国の文化についての学術的論考を読解できるようになる。
授業方法と留意点	英語、日本語によるリーディングとディスカッションを中心に進める。受講生にはアメリカ合衆国の文化や歴史に対する強い関心と共に、理論的、抽象的なものを含む多くの文献を精読する意欲が要求される。
授業 (指導) 計画	受講生の語学力および関心分野に合わせて教科書を選定し、最初の 3 週間で教科書以外の文献も含めた英語文献・日本語文献からなるリーディング・リストを作成する。以降、受講生はリストに従い、文献を読み進めながらディスカッションを行う。学期末には読了した文献についてのレポートを作成する。
事前・事後学習課題	毎回、指定のリーディングについての疑問やコメントを用意して授業に臨むこと。
評価基準	ディスカッションへの貢献 70% + 学期末レポート 30%
教材等	受講生と面談の上、指示する。
備考	研究室は 7 号館 3 階

科目名	英米言語文化特論Ⅴ B	科目名 (英文)	Topics in English Language and Cultures VB
配当年次	1 年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	鳥居 祐介

授業 (指導) 概要・目的	アメリカ研究(American Studies)の主要な理論と実践について学ぶ。アメリカ合衆国の人種、階級、ジェンダーに焦点をあてた学際研究の実例を読み、討議することを通じて研究分野への理解を深め、先行研究を批判的に読む姿勢を身につける。研究の実例は受講生の関心に応じて選ぶ。実例の中で分析対象とされている一次資料の読解も行う。
到達目標	英語圏のカルチュラル・スタディーズの問題意識と用語に親しみ、特にアメリカ合衆国の文化についての学術的論考を読解できるようになる。
授業方法と留意点	英語、日本語によるリーディングとディスカッションを中心に進める。受講生にはアメリカ合衆国の文化や歴史に対する強い関心と共に、理論的、抽象的なものを含む多くの文献を精読する意欲が要求される。
授業 (指導) 計画	受講生と面談の上、作成したリーディング・リストを適宜増補、改定しながら進める。受講生はリストに従い、文献を読みディスカッションを行う。学期末には読了した文献についてのレポートを作成する。
事前・事後学習課題	毎回、指定のリーディングについての疑問やコメントを用意して授業に臨むこと。
評価基準	ディスカッションへの貢献 70% + 学期末レポート 30%
教材等	受講生と面談の上、指示する。
備考	研究室は 7 号館 3 階

科目名	英米言語文化特論ⅦA	科目名 (英文)	Topics in English Language and Cultures VIIA
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	後藤 一章

授業 (指導) 概要・目的	この講義では、現代英語の語彙や統語にかかわる現象を、コーパス言語学の観点から検証する。
到達目標	英語の語彙の用法やパターンなどを、電子コーパスを用いて実証的に研究するための力を養う。
授業方法と留意点	コーパス言語学のテキストや論文を読んでいく。また、実際にコーパスの構築や分析も行う。コンピュータ処理を行うため、テキスト整形やファイル操作、可能であれば初歩的なプログラミングの知識を有していることが望ましい。
授業 (指導) 計画	前半：資料を読み、ディスカッションを行いながら、コーパス言語学の基本的な知識を習得する。 後半：コンピュータを使ってコーパスを構築し、キーワード検索・コンコーダンス分析・コロケーション解析などを行う。最終的に全体の内容をレポートにまとめる。
事前・事後学習課題	各回の指定教材を予め通読のうえ、要点を整理し、発表の準備をしておくこと。また、日頃から自らの考えをまとめておき、中間、及び期末課題に備えること (合計 30h)。
評価基準	授業時のパフォーマンスとレポートを基本に評価する。
教材等	授業中に配布する。
備考	

科目名	英米言語文化特論ⅦB	科目名 (英文)	Topics in English Language and Cultures VIIB
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	中島 直嗣

授業 (指導) 概要・目的	テーマは、「英語学と音声学」。研究対象の言語は英語とするが、必要に応じて日本語と比較・対照しながら考察していく。英語学の分野としては、音韻論、形態論、統語論、意味論、語用論、社会言語学の中から受講生が関心のあるテーマを中心に研究を進めていきたい。
到達目標	英語学と音声学の学問的知識と、人文科学の研究の手法を習得することを目標とする。
授業方法と留意点	文献・資料の読解、調査に基づく議論、レポートの作成などを中心に行っていく。
授業 (指導) 計画	・前半は、英語学や音声学に関する文献や資料を読解しながら、その要点を理解するとともに、疑問点や問題点を提起できるようにする。 ・後半は、その疑問点や問題点の解決方法について、言語科学的な手法に基づいて議論を展開し、論文が作成できるように指導していく。
事前・事後学習課題	【事前学習】 毎回、設定されたテーマについて、文献・資料を読んで、その内容を把握しておくこと。 【事後学習】 毎回の授業内容に基づいて、図書館等でさらに調べながら、理解と考察を深めること。
評価基準	発表や議論を中心とした授業への取り組み (50%) と、レポート (論文) (50%) を合わせて評価する。
教材等	授業中に指示したり、プリントを配布したりする。
備考	研究発表に関するフィードバックはその都度、レポートに関するフィードバックは第 15 回目の授業時に行う。

科目名	英米言語文化特論ⅧA	科目名 (英文)	Topics in English Language and Cultures VIIIA
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	齋藤 安以子

授業 (指導) 概要・目的	This course aims to study how technology (ICT) assists TEFL. You will overview various types of media technology and educational programs which have been used for language teaching and learning.
到達目標	-You will be able to evaluate ICT based teaching materials as a future teacher as well as an advanced learner of English. -You will be able to design EFL classroom activities for intermediate learners using media technology.
授業方法と留意点	-You need the basic knowledge of TEFL to learn the maximum in this course, though you don't have to be an experienced TEFL teacher. -Regular attendance with hard work is required.
授業 (指導) 計画	Media technology for school education Media technology for language classes Experience computer assisted EFL programs on market Evaluate the programs How do teachers use technology in class? How does technology assist class learning? Proposal
事前・事後学習課題	Most materials will be available in or through the facilities on campus. Make sure you will actually "experience" the EFL education programs introduced in advance. For a quick review, the following site will help: "CALL (computer assisted language learning)" by Graham Davies https://www.llas.ac.uk/resources/gpg/61 This site is much longer than the first one: "ICT4LT Module 1.4 Introduction to Computer Assisted Language Learning (CALL)" http://www.ict4lt.org/en/en_mod1-4.htm
評価基準	Presentation 40% Report 60%
教材等	to be announced
備考	

科目名	英米言語文化特論ⅧB	科目名 (英文)	Topics in English Language and Cultures VIIIB
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	松田 早恵

授業 (指導) 概要・目的	言語修得の過程においては、様々な個人差が学習に影響を与える。個人差の中には国籍、母語、性別など通常変化しないものもあるが、時間と共に変化するものもある。このコースでは、後者のタイプの個人差に焦点を当て、動機づけ、学習方略、コミュニケーションを取ろうとする意欲、不安感などの基本概念とそれぞれの分野の研究の流れを掴む。
到達目標	ことばを学ぶ上で影響を与える様々な個人差にはどのようなものがあるのかを学び、現在それぞれの分野ではどのような研究がされているのかを探る。
授業方法と留意点	文献・資料の読み込みなどのために授業外の学習時間確保が必要である。
授業 (指導) 計画	言語習得における個人差 個人差とは何か? という問いから始まり、様々な分野における個人差の定義を調べる。と同時に、個人差と言語習得の関係を探り、最新の個人差の捉え方を考察する。
事前・事後学習課題	【事前】初回授業時に配布するスケジュールにもとづき、指定された文献を読んで授業にのぞむ。 【事後】毎回の授業内容を要約、あるいは小レポートにまとめる。 総時間数：60時間
評価基準	毎週の課題 (20%)、発表 (40%)、レポート (40%) で評価する。
教材等	授業で指示する。
備考	

科目名	欧米地域文化特論 I A	科目名 (英文)	Topics in Western Regions and Cultures I A
配当年次	1 年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	有馬 善一

授業 (指導) 概要・目的	ヨーロッパは近代化をいち早く成し遂げることで、世界史をリードする存在となった。しかし、近代化の運動そのものは、ヨーロッパという一地域に限定されるものではなく、近代的な人間観、資本主義と産業社会の発達、科学・技術の進歩は、やがて地球的規模に拡大し、現代においてはかつて植民地として欧米に支配されていた地域の隆盛をみるに至っている。 本講義では近代を特徴付けている「近代性」とは何であったのかという問題提起から始めて、「もはや近代ではない」と言われる現代のポストモダンの動向の本質に関する考察まで議論を展開したい。
到達目標	近代性とは何か、近代的な人間とはいかなるものかについて理解する。
授業方法と留意点	教科書を用いない、ノートによる講義形式。参加者の積極的な発言も期待する。
授業 (指導) 計画	1. 自由主義と資本主義の発達 2. 合理主義と科学・技術の進歩 3. 近代的な人間の誕生
事前・事後学習課題	授業で取り上げる近代性に関わる諸概念について、あらかじめ調べてくる。 授業中で問題となった近代の問題について、適宜、参考図書を読み、内容を報告する。 事前・事後学習に最低 30 時間ずつ必要。
評価基準	平常点 (40%) とレポート (60%) で評価する。
教材等	アンソニー・ギデンズ『近代とはいかなる時代か?』(而立書房) 他は、適宜配布する
備考	

科目名	欧米地域文化特論 I B	科目名 (英文)	Topics in Western Regions and Cultures I B
配当年次	1 年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	有馬 善一

授業 (指導) 概要・目的	ヨーロッパは近代化をいち早く成し遂げることで、世界史をリードする存在となった。しかし、近代化の運動そのものは、ヨーロッパという一地域に限定されるものではなく、近代的な人間観、資本主義と産業社会の発達、科学・技術の進歩は、やがて地球的規模に拡大し、現代においてはかつて植民地として欧米に支配されていた地域の隆盛をみるに至っている。 本講義では近代を特徴付けている「近代性」とは何であったのかという問題提起から始めて、「もはや近代ではない」と言われる現代のポストモダンの動向の本質に関する考察まで議論を展開したい。
到達目標	ポスト・モダンとは何かということを理解し、ポスト・モダンの状況の問題性を把握する。
授業方法と留意点	教科書を用いない、ノートによる講義形式。参加者の積極的な発言も期待する。
授業 (指導) 計画	1. 資本主義の帰結としての情報化・消費化社会 2. グローバル化の問題 3. 近代的人間の〈死〉 4. 科学・技術の〈暴走〉と危険社会の到来
事前・事後学習課題	授業で取り上げるポストモダンに関わる諸概念について、あらかじめ調べてくる。 授業中で問題となった近代の問題について、適宜、参考図書を読み、内容を報告する。 事前・事後学習に最低 30 時間ずつ必要。
評価基準	平常点 (40%) とレポート (60%) で評価する。
教材等	教材を適宜配布する。 ボードリヤール『消費社会の神話と構造』(紀伊國屋書店)
備考	

科目名	欧米地域文化特論 II A	科目名 (英文)	Topics in Western Regions and Cultures II A
配当年次	1 年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	北條 ゆかり

授業 (指導) 概要・目的	メキシコ中央部に栄えていたアステカ王国が 1521 年、エルナン・コルテスに征服されてから、メキシコの先住民文明は絶滅したと誤解する人が今なお多い。現在のメキシコ文化は先スペイン期の伝統を土台に、スペインの色が混じったものが独立後に発展してきたものである。いくつもの文化がまじりあう、メスティサッへのプロセスを見てゆく。
到達目標	専門家による論文を批判的に読む。
授業方法と留意点	論文に利用された一次史料も読みながら、著者の論理を分析する。
授業 (指導) 計画	ラテンアメリカ史の中の異文化接触と文化変容について、史料の読解に基づく分析を行う。
事前・事後学習課題	毎回、進む範囲を決めておくので、予習を十二分にして授業に臨むこと。
評価基準	提出物 (レポートなど) による。
教材等	未定
備考	事前・事後学修に各 2 時間を要す。

科目名	欧米地域文化特論ⅡB	科目名(英文)	Topics in Western Regions and Cultures II B
配当年次	1年	単位数	2
学期(開講期)	後期	授業担当者	北條 ゆかり

授業(指導)概要・目的	メキシコ中央部に栄えていたアステカ王国が1521年、エルナン・コルテスに征服されてから、メキシコの先住民文明は絶滅したと誤解する人が今なお多い。現在のメキシコ文化は先スペイン期の伝統を土台に、スペインの色が混じったものが独立後に発展してきたものである。いくつもの文化がまじりあう、メスティサッへのプロセスを見てゆく。
到達目標	専門家による論文を批判的に読む。
授業方法と留意点	論文に利用された一次史料も読みながら、著者の論理を分析する。
授業(指導)計画	ラテンアメリカ史の中に見る異文化接触と文化変容を、史料の精読に基づき分析する。対象とする時代は、植民地時代に限らず、履修者の関心に沿って近現代を扱うこともある。
事前・事後学習課題	毎回、進む範囲を決めておくので、予習を十二分にして授業に臨むこと。
評価基準	提出物(レポートなど)による。
教材等	未定
備考	事前・事後学修に各2時間を要す。

科目名	欧米地域文化特論ⅢA	科目名(英文)	Topics in Western Regions and Cultures III A
配当年次	1年	単位数	2
学期(開講期)	前期	授業担当者	林田 敏子

授業(指導)概要・目的	歴史学の視点から西洋世界を中心とするジェンダー問題の諸相に迫る。第一次世界大戦期を生きた女性たちの多様な経験を追いながら、「戦う男」と「戦わない(戦えない)女」という図式ではとらえきれない戦時のジェンダー問題について考察する。募兵活動をはじめとする戦争プロパガンダに「動員」された女性の姿を分析することで、「犠牲者」「戦いを鼓舞する者」「平和の使者」といったさまざまな女性像について考察する。
到達目標	第一次世界大戦を中心とする西洋近現代史およびジェンダー史の概要をつかみ、論点を理解した上で、図像史料や手稿史料等の読解方法を習得することを目標とする。
授業方法と留意点	一次史料を含む多くの文献をもちいるため、必ず予習をして授業にのぞむこと。
授業(指導)計画	(1)大戦研究の今、(2)大戦とジェンダー～「戦う性」と「戦わない性」～、(3)犠牲者としての女性～ベルギーの悲劇～、(4)戦いを鼓舞する女～白い羽運動～、(5)銃後の守りと戦時ヴォランティア
事前・事後学習課題	中間発表および期末レポート作成(合計30h)
評価基準	授業への取り組み(20%)、中間発表(40%)、レポート(40%)で評価する。
教材等	プリント配布。参考文献については適宜指示する。
備考	中間発表に関するフィードバックは発表時、レポートに関するフィードバックは第15回目の授業のなかで実施する。

科目名	欧米地域文化特論ⅢB	科目名(英文)	Topics in Western Regions and Cultures III B
配当年次	1年	単位数	2
学期(開講期)	後期	授業担当者	林田 敏子

授業(指導)概要・目的	歴史学の視点から西洋世界を中心とするジェンダー問題の諸相に迫る。第一次世界大戦期を生きた女性たちの多様な経験を追いながら、「戦う男」と「戦わない(戦えない)女」という図式ではとらえきれない戦時のジェンダー問題について考察する。とくに、前線と銃後の境を越えて「戦った」女性たちに焦点をあて、女性部隊が巻き起こした論争やスキャンダルを通して、ジェンダーとミリタリズムの関係について考察する。
到達目標	第一次世界大戦を中心とする西洋近現代史およびジェンダー史の概要をつかみ、論点を理解した上で、図像史料や手稿史料等の読解方法を習得することを目標とする。
授業方法と留意点	一次史料を含む多くの文献をもちいるため、必ず予習をして授業にのぞむこと。
授業(指導)計画	(1)「男の聖域」への進出～「戦う」女たち～、(2)セルビア軍の女性兵士、(3)ロシアの女性兵士、(4)イギリスの「戦う」女たち～陸海軍女性部隊～、(5)大戦・ジェンダー・ミリタリズム
事前・事後学習課題	事前・事後学習課題については毎回、指示する。 中間発表および期末レポート作成(合計30h)
評価基準	授業への取り組み(20%)、中間発表(40%)、期末レポート(40%)で評価する。
教材等	プリント配布。参考文献については適宜指示する。
備考	中間発表に関するフィードバックは発表時、期末レポートに関するフィードバックは第15回目の授業のなかで実施する。

科目名	欧米地域文化特論ⅣA	科目名 (英文)	Topics in Western Regions and Cultures IV A
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	北條 ゆかり

授業 (指導) 概要・目的	なぜ人は国境を越えて移動するのか？これはもっぱら経済格差によるプッシュ・プル要因によって説明できる問題ではない。送り出し国の社会構造、受け入れ国の法制、受け入れ社会の特殊な需要背景、双方の歴史的な関係などを考慮すべきであり、社会学的、経済学的、政治学的な解明を要す。グローバリゼーションが深化するなかで現代世界に広がる社会の多文化化がもたらしている変化の実態を、日本社会に焦点を当て多義的に把握することから始める。
到達目標	「多民族・多文化」、「複数言語」という条件が現代世界の各地に展開し、軋轢ばかりではなく社会・文化的変容を生みだしている。「移民」という言葉すら定着してはいない日本であるが、日本の地域社会に着目し、多文化政策の問題点を考察する。
授業方法と留意点	受講者の関心や専攻分野に鑑み、授業で扱う地域は日本社会とは限らない。
授業 (指導) 計画	テーマに関する基本文献を読むことで基礎知識を蓄えた後、一連の論文を読み研究動向を把握する。
事前・事後学習課題	予め配布された文献資料や指示された参考書を読み、レジュメを作成しておくこと。
評価基準	授業への取り組み状況とレポートによる。
教材等	適宜配布する。
備考	事前・事後学習に要する総時間数は約60時間を目安とする。

科目名	欧米地域文化特論ⅣB	科目名 (英文)	Topics in Western Regions and Cultures IV B
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	北條 ゆかり

授業 (指導) 概要・目的	なぜ人は国境を越えて移動するのか？これはもっぱら経済格差によるプッシュ・プル要因によって説明できる問題ではない。送り出し国の社会構造、受け入れ国の法制、受け入れ社会の特殊な需要背景、双方の歴史的な関係などを考慮すべきであり、社会学的、経済学的、政治学的な解明を要す。人の移動の結果、現代世界で生じている諸問題のうち、多文化共生への課題を検討する。
到達目標	「多民族・多文化」、「複数言語」という条件が現代世界の各地に展開し、軋轢ばかりではなく社会・文化的変容を生みだしている。多文化共生を実現するために必要となる制度改革や政策について米州および欧州の経験をもとに考察する。
授業方法と留意点	受講者の関心や専攻分野に鑑み、授業で扱う地域は欧米とは限らない。
授業 (指導) 計画	テーマに関する基本文献を読むことで基礎知識を蓄えた後、一連の論文を読み研究動向を把握する。
事前・事後学習課題	予め配布された文献資料や指示された参考書を読み、レジュメを作成しておくこと。
評価基準	授業への取り組み状況とレポートによる。
教材等	適宜配布する。
備考	事前・事後学習に要する総時間数は約60時間を目安とする。

科目名	欧米言語文化研究総合演習Ⅰ	科目名 (英文)	Seminar on Western Languages and Cultures I
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	西川 眞由美

授業 (指導) 概要・目的	総合演習Ⅰは英米の地域を中心とした言語・文化・思想・歴史と多岐にわたった領域にまたがっており、各々専門の研究者の指導の下、大学院学生として各自の研究テーマに沿った指導を受ける。特に、演習Ⅰは今後2年間の指導計画を実施する準備段階にあり、各指導研究者と徹底的に研究の方向と方法について議論を深めることが大事である。今学期はそのための入門指導を精密に実施し、研究倫理について理解し、今後の研究の指針を構築する。
到達目標	各自の研究テーマを掘り下げ、実現可能な計画のもと理論的かつ実践的な基礎知識を養う。論文作成や資料収集における研究倫理のあり方を理解する。
授業方法と留意点	各研究者の指示に従う。
授業 (指導) 計画	各自の研究テーマに即して、最先端の基礎知識を理論的かつ実践的に取り組めるよう、効率よく研究できる最適な方法を通して指導するが、各分野の授業計画については各指導研究者が行う。
事前・事後学習課題	【事前】 資料収集・論文作成など各自で必要な作業を行う。 【事後】 指導教員に指摘された箇所を検討し、修正する。
評価基準	各指導研究者の指示に従う。
教材等	各指導研究者の指示に従う。
備考	

科目名	欧米言語文化研究総合演習 I	科目名 (英文)	Seminar on Western Languages and Cultures I
配当年次	1 年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	住吉 誠

授業 (指導) 概要・目的	総合演習 I は英米の地域を中心とした言語・文化など多岐に渡った領域にまたがっている。大学院学生として各自の研究テーマに沿った指導を受ける。特に、演習 I は今後 2 年間の指導計画を実施する準備段階であり、担当者と徹底的に研究の方向と方法について議論を深めることが大切である。前期はそのための入門指導を実施し、研究倫理について理解し、今後の研究の指針を構築する。
到達目標	各自の研究テーマを掘り下げ、実現可能な計画の下、理論的かつ実践的な基礎知識を獲得する。 論文作成や資料収集における研究倫理のあり方を理解する。
授業方法と留意点	理論に偏らず、具体的なデータを使用した指導を行う。そのため、単に文献を読むだけでなく、英語の実例を丹念に集めていく作業が必要になる。普段から、ニュースやペーパーバックなどの英語に触れることが望ましい。
授業 (指導) 計画	学生の研究テーマに即して、最先端の基礎知識を獲得し、理論に偏らず実証的な研究に取り組めるよう、最適な方法を使って指導する。 第 1 回目：オリエンテーション、今後の方針の確認。 第 2 回目：研究計画テーマの設定および、研究計画の作成。 第 3 回目～第 15 回目：研究計画にそって、文献の渉猟やデータの収集を進める。
事前・事後学習課題	事前：文献渉猟や読み込み、資料収集・論文作成など各自手必要な作業を行う。 事後：指導教員に指摘された問題点などを検討し、修正していく。
評価基準	授業中のプレゼンテーション (50%) 期末レポート (50%)
教材等	授業中に指示する。
備考	

科目名	欧米言語文化研究総合演習 I	科目名 (英文)	Seminar on Western Languages and Cultures I
配当年次	1 年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	林田 敏子

授業 (指導) 概要・目的	総合演習 I は英米の地域を中心とした言語・文化・思想・歴史と多岐にわたった領域にまたがっており、各々専門の研究者の指導の下、大学院学生として各自の研究テーマにそった指導を受ける。特に、演習 I は今後 2 年間の指導計画を実施する準備段階であり、各指導研究者と徹底的に研究の方向と方法について議論を深めることが大事である。今学期はそのための入門指導を精密に実施し、研究倫理について理解し、今後の研究の指針を構築する。
到達目標	各自の研究テーマを掘り下げ、実現可能な計画の下理論的かつ実践的な基礎知識を養う。 論文作成や資料収集における研究倫理のあり方を理解する。
授業方法と留意点	各研究者の指示に従う。
授業 (指導) 計画	各自の研究テーマに則して、最先端の基礎知識を理論的かつ実践的にとり組めるよう、効率よく研究できる最適な方法を通して指導するが、各分野の授業計画については各指導研究者が行う。
事前・事後学習課題	【事前】資料収集・論文作成など各自で必要な作業を行う。 【事後】指導教員に指摘された箇所を検討し、修正する。 (総時間数：60 h)
評価基準	授業への取り組み (20%)、レポート (80%) で評価する。
教材等	各指導研究者の指示に従う。
備考	レポート課題については、第 15 回目の授業のなかでフィードバックをおこなう。

科目名	欧米言語文化研究総合演習 I	科目名 (英文)	Seminar on Western Languages and Cultures I
配当年次	1 年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	北條 ゆかり

授業 (指導) 概要・目的	総合演習 I は英米の地域を中心とした言語・文化・思想・歴史と多岐にわたった領域にまたがっており、各々専門の研究者の指導の下、大学院学生として各自の研究テーマにそった指導を受ける。特に、演習 I は今後 2 年間の指導計画を実施する準備段階であり、各指導研究者と徹底的に研究の方向と方法について議論を深めることが大事である。今学期はそのための入門指導を精密に実施し、研究倫理について理解し、今後の研究の指針を構築する。
到達目標	各自の研究テーマを掘り下げ、実現可能な計画の下理論的かつ実践的な基礎知識を養う。 論文作成や資料収集における研究倫理のあり方を理解する。
授業方法と留意点	各研究者の指示に従う。
授業 (指導) 計画	各自の研究テーマに則して、最先端の基礎知識を理論的かつ実践的にとり組めるよう、効率よく研究できる最適な方法を通して指導するが、各分野の授業計画については各指導研究者が行う。
事前・事後学習課題	【事前】資料収集・論文作成など各自で必要な作業を行う。 【事後】指導教員に指摘された箇所を検討し、修正する。 (総時間数：60 h)
評価基準	授業への取り組み (20%)、レポート (80%) で評価する。
教材等	各指導研究者の指示に従う。
備考	レポート課題については、第 15 回目の授業のなかでフィードバックをおこなう。

科目名	欧米言語文化研究総合演習 I	科目名 (英文)	Seminar on Western Languages and Cultures I
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	齋藤 安以子

授業 (指導) 概要・目的	<p>欧米言語文化研究総合演習は欧米の地域を中心とした言語・文化・思想・歴史と多岐にわたった領域にまたがっており、各々専門の研究者の指導の下、大学院学生として各自の研究テーマにそった指導を受ける。基礎文献・参考文献等、適切な選択をした上で各自のテーマを自分の視点で論文として完成することを目指す。</p> <p>This course aims to introduce basic research methods and presentation skills for graduate students of art, literature, and education.</p> <p>The main topic of this term is stylistics.</p>
到達目標	<p>Students will learn</p> <ul style="list-style-type: none"> - to read academic English and academic Japanese - to keep accurate records - to summarize in English and Japanese - to apply a theory to further analyze a fiction
授業方法と留意点	<p>Workshop</p> <p>Basic requirements:</p> <ul style="list-style-type: none"> -regular attendance -hard work -passion to the subject
授業 (指導) 計画	<p>Week 1-5 Read the text and discuss in class.</p> <p>Week 6-10 Read the text and apply the findings to study a fiction.</p> <p>Week 11-15 Presentation and essay writing</p>
事前・事後学習課題	TBA
評価基準	<p>discussion 30%</p> <p>presentation 30%</p> <p>essay 40%</p>
教材等	<p>G. Leech & M. Short Style in Fiction http://sv-etc.nl/styleinfiction.pdf</p>
備考	

科目名	欧米言語文化研究総合演習 I	科目名 (英文)	Seminar on Western Languages and Cultures I
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	有馬 善一

授業 (指導) 概要・目的	欧米の思想・文化を研究領域とし、学生各自の研究テーマにそった指導をする。
到達目標	基礎文献・参考文献等、適切な選択をした上で各自のテーマを設定し、基礎的文献を蒐集し、読み進めていく。
授業方法と留意点	少人数の演習形式。与えられた課題に対する報告が主な内容となる。
授業 (指導) 計画	入学当初に提出した各自の研究テーマと研究計画を踏まえ、各指導教員の指導のもとに研究倫理のあり方を理解し、各自が研究資料の調査・収集等の予備的作業を行ない、討論・発表を通じて、研究遂行に必要な諸技能を修得する。
事前・事後学習課題	事前事後学習に最低 30 時間ずつ必要。
評価基準	平常点 (40%) とレポート (60%) で評価する。
教材等	受講生のテーマに沿ったものを教示する。
備考	有馬研究室は 7 号館 4 階

科目名	欧米言語文化研究総合演習 I	科目名 (英文)	Seminar on Western Languages and Cultures I
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	杉浦 秀行

授業 (指導) 概要・目的	大学院学生に相応しいリサーチ・リテラシーを身に付けることを目的とする。また、各自の研究テーマの設定や研究計画の作成をどのように進めていくか徹底的に議論していく。さらに、各自の研究テーマに係る文献レビューの進め方や内容について深い理解を得るためのトレーニングを行う。
到達目標	・文献レビュー、リサーチ・メソドロジー、データ収集に伴う Human Ethics の問題と対応、文献表の作成法 (Endnote の利用法) など、研究を進めていくうえでの基本的なリサーチ・リテラシーを身に付ける ・各自の研究テーマに係る文献レビューができるようになる
授業方法と留意点	欧米言語文化研究総合演習 I では徹底して研究を進めていくうえでの必要な知識・技能・態度の習得に励んでいただきます。そのための各種トレーニングを進めていきます。
授業 (指導) 計画	第1回目：オリエンテーション、今後の方針の確認 第2回目～第14回目：研究リテラシーに係る講義と演習 (トレーニング) 第15回目：振り返り
事前・事後学習課題	事前：指定された課題の取り組みや、文献の読み込み 事後：指定された課題の取り組みや、講義・演習内容の復習
評価基準	発表：20% 課題：30% 期末レポート：50%
教材等	授業中に指示する。
備考	

科目名	欧米言語文化研究総合演習 I	科目名 (英文)	Seminar on Western Languages and Cultures I
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	鳥居 祐介

授業 (指導) 概要・目的	欧米言語文化研究総合演習は欧米の地域を中心とした言語・文化・思想・歴史と多岐にわたった領域にまたがっており、各々専門の研究者の指導の下、大学院学生として各自の研究テーマにそった指導を受ける。基礎文献・参考文献等、適切な選択をした上で各自のテーマを自分の視点で論文として完成することを目指す。
到達目標	学期終了までに実行可能な修士論文計画を作成する。
授業方法と留意点	面談による個別指導となる。受講生は研究ノートを毎週書き進める。ノートに基づいて指導を行う。
授業 (指導) 計画	学期前半は重要な参考文献、二次資料の収集と読み込みを徹底する。後半に一次資料の収集方法を含めた研究計画の作成を行う。
事前・事後学習課題	毎週、研究ノートを書き進めること。
評価基準	70%は平常点。計画的な資料収集、読み込みを行い、個別指導に出席できているかを評価する。 30%は研究計画。学期終了時のものを評価する。
教材等	個別に指定する。
備考	

科目名	欧米言語文化研究総合演習 I	科目名 (英文)	Seminar on Western Languages and Cultures I
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	吉村 征洋

授業 (指導) 概要・目的	総合演習 I は英米の地域を中心とした言語・文化など多岐に渡った領域にまたがっている。大学院学生として各自の研究テーマに沿った指導を受ける。特に、演習 I は今後2年間の指導計画を実施する準備段階であり、担当者と徹底的に研究の方向と方法について議論を深めることが大切である。前期はそのための入門指導を実施し、研究倫理について理解し、今後の研究の指針を構築する。
到達目標	各自の研究テーマを掘り下げ、実現可能な計画の下、理論的かつ実践的な基礎知識を獲得する。 論文作成や資料収集における研究倫理のあり方を理解する。
授業方法と留意点	理論に偏らず、具体的なテキストの言葉に注視しながら研究を行う。
授業 (指導) 計画	学生の研究テーマに即して、最先端の基礎知識を獲得し、理論に偏らず実証的な研究に取り組めるよう、最適な方法を使って指導する。 第1回目：オリエンテーション、今後の方針の確認。 第2回目：研究計画テーマの設定および、研究計画の作成。 第3回目～第15回目：研究計画にそって、文献の渉猟やデータの収集を進める。
事前・事後学習課題	事前：文献渉猟や読み込み、資料収集・論文作成など各自手必要な作業を行う。 事後：指導教員に指摘された問題点などを検討し、修正していく。
評価基準	プレゼンテーション 20% レポート 80%
教材等	授業中に指示する。
備考	

科目名	欧米言語文化研究総合演習Ⅱ	科目名 (英文)	Seminar on Western Languages and Cultures II
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	西川 眞由美

授業 (指導) 概要・目的	総合演習Ⅱは総合演習Ⅰの基礎の上、さらにディスカッション・文献研究などを通して各自の研究テーマを深め、応用する能力を養う。
到達目標	各研究テーマの理解とその知識を応用する能力を学ぶ。
授業方法と留意点	各指導研究者の指示に従う。
授業 (指導) 計画	各指導研究者のもと、理論的かつ実践的な応用力を身につける最適な方法を基に指導計画を設定するが、各分野の授業計画については各指導研究者が行う。
事前・事後学習課題	【事前】 資料収集・論文作成など各自で必要な作業を行う。 【事後】 指導教員に指摘された箇所を検討し、修正する。
評価基準	各指導研究者の指示に従う。
教材等	各指導研究者の指示に従う。
備考	

科目名	欧米言語文化研究総合演習Ⅱ	科目名 (英文)	Seminar on Western Languages and Cultures II
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	住吉 誠

授業 (指導) 概要・目的	総合演習Ⅰは英米の地域を中心とした言語・文化など多岐に渡った領域にまたがっている。大学院学生として各自の研究テーマに沿った指導を受ける。特に、演習Ⅰは今後2年間の指導計画を実施する準備段階であり、担当者と徹底的に研究の方向と方法について議論を深めることが大切である。前期はそのための入門指導を実施し、研究倫理について理解し、今後の研究の指針を構築する。
到達目標	各自の研究テーマを掘り下げ、実現可能な計画の下、理論的かつ実践的な基礎知識を獲得する。 論文作成や資料収集における研究倫理のあり方を理解する。
授業方法と留意点	理論に偏らず、具体的なデータを使用した指導を行う。そのため、単に文献を読むだけでなく、英語の実例を丹念に集めていく作業が必要になる。普段から、ニュースやペーパーバックなどの英語に触れることが望ましい。
授業 (指導) 計画	学生の研究テーマに即して、最先端の基礎知識を獲得し、理論に偏らず実証的な研究に取り組めるよう、最適な方法を使って指導する。 第1回目：欧米言語文化総合演習Ⅰの指導内容にもとづき、今後の方針の確認。 第2回目～第15回目：研究計画にそって、文献の渉猟やデータの収集を進める。
事前・事後学習課題	事前：文献渉猟や読み込み、資料収集・論文作成など各自手必要な作業を行う。 事後：指導教員に指摘された問題点などを検討し、修正していく。
評価基準	授業中のプレゼンテーション (50%) 期末レポート (50%)
教材等	授業中に指示する。
備考	

科目名	欧米言語文化研究総合演習Ⅱ	科目名 (英文)	Seminar on Western Languages and Cultures II
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	林田 敏子

授業 (指導) 概要・目的	総合演習Ⅱは総合演習Ⅰの基礎の上に、さらにディスカッション・文献研究等を通して各自の研究テーマを深め、応用する能力を養う。
到達目標	各研究テーマの理解とその知識を応用する能力を学ぶ。
授業方法と留意点	各指導研究者の指示に従う。
授業 (指導) 計画	各指導研究者の下、理論的かつ実践的な応用力を身につける最適な方法を基に指導計画を設定するが、各分野の授業計画については各指導研究者が行う。
事前・事後学習課題	【事前】 資料収集・論文作成など各自で必要な作業を行う。 【事後】 指導教員に指摘された箇所を検討し、修正する。 (総時間数：60h)
評価基準	授業への取り組み (20%)、ディスカッション (40%)、レポート (40%) で評価する。
教材等	各指導研究者の指示に従う。
備考	ディスカッションに関しては随時、レポート課題に関しては第15回目の授業でフィードバックをおこなう。

科目名	欧米言語文化研究総合演習Ⅱ	科目名 (英文)	Seminar on Western Languages and Cultures II
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	北條 ゆかり

授業 (指導) 概要・目的	総合演習Ⅱは総合演習Ⅰの基礎の上に、さらにディスカッション・文献研究等を通して各自の研究テーマを深め、応用する能力を養う。
到達目標	各研究テーマの理解とその知識を応用する能力を学ぶ。
授業方法と留意点	各指導研究者の指示に従う。
授業 (指導) 計画	各指導研究者の下、理論的かつ実践的な応用力を身につける最適な方法を基に指導計画を設定するが、各分野の授業計画については各指導研究者が行う。
事前・事後学習課題	【事前】資料収集・論文作成など各自に必要な作業を行う。 【事後】指導教員に指摘された箇所を検査し、修正する。 (総時間数: 60h)
評価基準	授業への取り組み (60%)、ディスカッション (20%)、レポート (20%) で評価する。
教材等	各指導研究者の指示に従う。
備考	ディスカッションに関しては随時、レポート課題に関しては第15回目の授業でフィードバックをおこなう。

科目名	欧米言語文化研究総合演習Ⅱ	科目名 (英文)	Seminar on Western Languages and Cultures II
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	齋藤 安以子

授業 (指導) 概要・目的	欧米言語文化研究総合演習は欧米の地域を中心とした言語・文化・思想・歴史と多岐にわたった領域にまたがっており、各々専門の研究者の指導の下、大学院生として各自の研究テーマにそった指導を受ける。基礎文献・参考文献等、適切な選択をした上で各自のテーマを自分の視点で論文として完成することを目指す。 This course aims to introduce basic research methods and presentation skills for graduate students of art, literature, and education. The main topic of this term is stylistics.
到達目標	Students will learn - to read academic English and academic Japanese - to search related resources - to give presentations in English and Japanese - to write a structured essay based on their research
授業方法と留意点	Workshop
授業 (指導) 計画	Week 1-5 Read the text and discuss in class. Week 6-10 Search and read related resources. Week 11-15 Presentation and essay writing
事前・事後学習課題	TBA
評価基準	final paper 100%
教材等	G. Leech & M. Short Style in Fiction http://sv-etc.nl/styleinfiction.pdf
備考	

科目名	欧米言語文化研究総合演習Ⅱ	科目名 (英文)	Seminar on Western Languages and Cultures II
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	有馬 善一

授業 (指導) 概要・目的	欧米の思想・文化を研究領域とし、学生各自の研究テーマにそった指導をする。
到達目標	前期に引き続き、基礎文献・参考文献等、適切な選択をした上で各自のテーマを設定し、基礎的文献を蒐集し、読み進めていく。1年間の研究の成果を報告書としてまとめる。
授業方法と留意点	少人数の演習形式。与えられた課題に対する報告が主な内容となる。
授業 (指導) 計画	入学当初に提出した各自の研究テーマと研究計画を踏まえ、各指導教員の指導のもとに研究倫理のあり方を理解し、各自が研究資料の調査・収集等の予備的作業を行ない、討論・発表を通じて、研究遂行に必要な諸技能を修得する。 報告書の作成とこれに対する添削指導を行う。
事前・事後学習課題	事前事後学習に最低30時間ずつ必要。
評価基準	平常点 (40%) とレポート (60%) で評価する。
教材等	受講生のテーマに沿ったものを教示する。
備考	有馬研究室は7号館4階

科目名	欧米言語文化研究総合演習Ⅱ	科目名 (英文)	Seminar on Western Languages and Cultures II
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	杉浦 秀行

授業 (指導) 概要・目的	欧米言語文化研究総合演習Ⅰで身に付けたリサーチ・リテラシーに基づき、各自の研究テーマや研究計画について徹底的に議論していく。また、欧米言語文化研究総合演習Ⅰに引き続き、各自の研究テーマに係る文献レビューの進め方や内容について深い理解を得るためのトレーニングを行う。
到達目標	・基本的なりサーチ・リテラシーを駆使して、適切に研究テーマを設定し、研究計画を作成できるようになる ・各自の研究テーマに係る文献レビューができるようになる
授業方法と留意点	欧米言語文化研究総合演習Ⅱでは各自の研究テーマ、研究計画について徹底的に議論していきます。
授業 (指導) 計画	第1回目：オリエンテーション、今後の方針の確認 第2回目～第14回目：会話分析、相互行為言語学、ジェスチャー研究の中から、各自の研究テーマに係る文献について順次取り上げ、その内容について議論していく。並行して、会話データを分析するトレーニングとして、演習 (データ・セッション) をできる限り毎回取り入れていく 第15回目：振り返り
事前・事後学習課題	事前：指定された課題の取り組みや、文献の読み込み 事後：指定された課題の取り組みや、講義・演習内容の復習
評価基準	発表：20% 課題：30% 期末レポート：50%
教材等	授業中に指示する。
備考	

科目名	欧米言語文化研究総合演習Ⅱ	科目名 (英文)	Seminar on Western Languages and Cultures II
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	鳥居 祐介

授業 (指導) 概要・目的	欧米言語文化研究総合演習は欧米の地域を中心とした言語・文化・思想・歴史と多岐にわたった領域にまたがっており、各々専門の研究者の指導の下、大学院学生として各自の研究テーマにそった指導を受ける。基礎文献・参考文献等、適切な選択をした上で各自のテーマを自分の視点で論文として完成することを目指す。
到達目標	学期終了時には修士論文の一部の執筆を開始できる状態にする。
授業方法と留意点	面談による個別指導となる。受講生は研究ノートを毎週書き進める。ノートに基づいて指導を行う。
授業 (指導) 計画	前期の計画を改訂しながら、週一回の面談指導に従い、研究を進める。
事前・事後学習課題	毎週、研究ノートを書き進めること。
評価基準	70%は平常点。計画的な資料収集、読み込みを行い、個別指導に出席できているかを評価する。 30%は改訂した研究計画。学期終了時のものを評価する。
教材等	個別に指定する。
備考	

科目名	欧米言語文化研究総合演習Ⅱ	科目名 (英文)	Seminar on Western Languages and Cultures II
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	吉村 征洋

授業 (指導) 概要・目的	総合演習Ⅰは英米の地域を中心とした言語・文化など多岐に渡った領域にまたがっている。大学院学生として各自の研究テーマに沿った指導を受ける。特に、演習Ⅰは今後2年間の指導計画を実施する準備段階であり、担当者と徹底的に研究の方向と方法について議論を深めることが大切である。前期に引き続き、入門指導を実施し、研究倫理について理解し、今後の研究の指針を構築する。
到達目標	各自の研究テーマを掘り下げ、実現可能な計画の下、理論的かつ実践的な基礎知識を獲得する。 論文作成や資料収集における研究倫理のあり方を理解する。
授業方法と留意点	理論に偏らず、具体的なテキストの言葉に注視しながら研究を行う。
授業 (指導) 計画	学生の研究テーマに即して、最先端の基礎知識を獲得し、理論に偏らず実証的な研究に取り組めるよう、最適な方法を使って指導する。 第1回目：オリエンテーション、今後の方針の確認。 第2回目：研究計画テーマの設定および、研究計画の作成。 第3回目～第15回目：研究計画にそって、文献の渉猟やデータの収集を進める。
事前・事後学習課題	事前：文献渉猟や読み込み、資料収集・論文作成など各自必要な作業を行う。 事後：指導教員に指摘された問題点などを検討し、修正していく。
評価基準	プレゼンテーション 20% レポート 80%
教材等	授業中に指示する。
備考	

科目名	欧米言語文化研究総合演習Ⅲ	科目名 (英文)	Seminar on Western Languages and Cultures III
配当年次	2年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	西川 眞由美

授業 (指導) 概要・目的	総合演習Ⅰ、Ⅱの内容をさらに精密に研究し、指導研究者の指導に基づいて、修士論文作成の準備に取り掛かる。
到達目標	各自の研究テーマについて、修士論文に向けて明確な方向性を持つ。
授業方法と留意点	各指導研究者の指示に従う。
授業 (指導) 計画	各指導研究者のもと、各自の研究テーマを修士論文の作成に向けて効果的な指導をする。
事前・事後学習課題	【事前】 資料収集・論文作成など各自に必要な作業を行う。 【事後】 指導教員に指摘された箇所を検討し、修正する。
評価基準	各指導研究者の指示に従う。
教材等	各指導研究者の指示に従う。
備考	

科目名	欧米言語文化研究総合演習Ⅲ	科目名 (英文)	Seminar on Western Languages and Cultures III
配当年次	2年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	住吉 誠

授業 (指導) 概要・目的	欧米言語文化研究総合演習Ⅰ、Ⅱで行った研究調査をさらに精査し、研究指導計画にもとづいて、修士論文作成の準備に取り掛かる。 担当教員と討議したスケジュールにもとづいて、計画的に文献の渉猟、データの収集を行いながら、論文の章立てにそって作成にとりかかる。作成の過程で、さらに指導教員との議論を重ねながら、内容をより深めていく。
到達目標	各自の研究テーマにもとづいて、修士論文の具体的な方向性をもつ。 論文作成にかかるスケジュールを決め、計画的な執筆ができるようになる。 関連する文献の内容を理解できるようになる。 修士論文を書き始め、疑問点などを明らかにし、それに自らの解答を準備できるようになる。
授業方法と留意点	先行研究の徹底的な読み込みとデータの綿密な収集を行い、修士論文の内容につなげていく。
授業 (指導) 計画	第1回目～第15回目：先行研究の検討や収集した具体例にもとづいて、指導担当者との議論を行い、修士論文の内容をより妥当性のあるものにしていく。
事前・事後学習課題	事前：文献の渉猟と読み込み、具体例の収集など、修士論文作成に必要な作業を各自で行う。 事後：指導担当者との議論を受けて、問題点などを修正する。
評価基準	授業中のプレゼンテーション (50%) 修士論文の下書きを含めたレポート (50%)
教材等	授業中に指示する。
備考	

科目名	欧米言語文化研究総合演習Ⅲ	科目名 (英文)	Seminar on Western Languages and Cultures III
配当年次	2年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	林田 敏子

授業 (指導) 概要・目的	総合演習Ⅰ、Ⅱの内容をさらに精密に研究し、指導研究者の指導に基づいて、修士論文作成の準備に取り掛かる。
到達目標	各自の研究テーマについて、修士論文に向けて明確な方向性をもつ。
授業方法と留意点	各指導研究者の指示に従う。
授業 (指導) 計画	各指導研究者の指導の下、各自の研究テーマを修士論文の作成に向け効果的な指導をする。
事前・事後学習課題	【事前】 資料収集・論文作成など各自に必要な作業を行う。 【事後】 指導教員に指摘された箇所を検討し、修正する。 (総時間数：60h)
評価基準	授業への取り組み (20%)、レポート (80%) で評価する。
教材等	各指導研究者の指示に従う。
備考	レポート作成過程で出される課題に関しては随時、レポート課題に関しては第15回目の授業のなかでフィードバックをおこなう。

科目名	欧米言語文化研究総合演習Ⅲ	科目名 (英文)	Seminar on Western Languages and Cultures III
配当年次	2年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	北條 ゆかり

授業 (指導) 概要・目的	総合演習Ⅰ、Ⅱの内容をさらに精密に研究し、指導研究者の指導に基づいて、修士論文作成の準備に取り掛かる。
到達目標	各自の研究テーマについて、修士論文に向けて明確な方向性をもつ。
授業方法と留意点	各指導研究者の指示に従う。
授業 (指導) 計画	各指導研究者の指導の下、各自の研究テーマを修士論文の作成に向け効果的な指導をする。
事前・事後学習課題	【事前】 資料収集・論文作成など各自に必要な作業を行う。 【事後】 指導教員に指摘された箇所を検討し、修正する。 (総時間数：60h)
評価基準	授業への取り組み (50%)、レポート (50%) で評価する。
教材等	各指導研究者の指示に従う。
備考	レポート作成過程で出される課題に関しては随時、レポート課題に関しては第15回目の授業のなかでフィードバックをおこなう。

科目名	欧米言語文化研究総合演習Ⅲ	科目名 (英文)	Seminar on Western Languages and Cultures III
配当年次	2年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	齋藤 安以子

授業 (指導) 概要・目的	<p>欧米言語文化研究総合演習は欧米の地域を中心とした言語・文化・思想・歴史と多岐にわたった領域にまたがっており、各々専門の研究者の指導の下、大学院学生として各自の研究テーマにそった指導を受ける。基礎文献・参考文献等、適切な選択をした上で各自のテーマを自分の視点で論文として完成することを目指す。</p> <p>This course aims to introduce basic research methods and presentation skills for graduate students of art, literature, and education.</p> <p>The main topic of this term is TEFL in Japan.</p>
到達目標	<p>Students will learn</p> <ul style="list-style-type: none"> - to read academic English and academic Japanese - to keep accurate records - to summarize in English and Japanese - to apply a theory to further analyze data
授業方法と留意点	Workshop
授業 (指導) 計画	<p>Week 1-5 Read the text and discuss in class.</p> <p>Week 6-10 Read the text and try out the findings.</p> <p>Week 11-15 Presentation and essay writing</p>
事前・事後学習課題	TBA
評価基準	<p>discussion & presentation 30%</p> <p>final paper 70%</p>
教材等	<p>A. Doiz, D. Lasagabaster & J M Suerra (Eds.) English-Medium Instruction at Universities Multilingual Matters</p> <p>Other references will be introduced at the beginning of the term.</p>
備考	

科目名	欧米言語文化研究総合演習Ⅲ	科目名 (英文)	Seminar on Western Languages and Cultures III
配当年次	2年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	有馬 善一

授業 (指導) 概要・目的	欧米の思想・文化を研究領域とし、学生各自の研究テーマにそった指導をする。
到達目標	前期に引き続き、基礎文献・参考文献等、適切な選択をした上で各自のテーマを設定し、基礎的文献を蒐集し、読み進めていく。修士論文のテーマを確定させ、さらに中間発表を行う。
授業方法と留意点	少人数の演習形式。与えられた課題に対する報告が主な内容となる。
授業 (指導) 計画	<p>入学当初に提出した各自の研究テーマと研究計画を踏まえ、各指導教員の指導のもとに研究倫理のあり方を理解し、各自が研究資料の調査・収集等の予備的作業を行ない、討論・発表を通じて、研究遂行に必要な諸技能を修得する。</p> <p>修士論文のテーマの確定と中間発表。</p>
事前・事後学習課題	事前事後学習に最低 60 時間ずつ必要。
評価基準	平常点 (40%) とレポート (60%) で評価する。
教材等	受講生のテーマに沿ったものを教示する。
備考	有馬研究室は 7 号館 4 階

科目名	欧米言語文化研究総合演習Ⅲ	科目名 (英文)	Seminar on Western Languages and Cultures III
配当年次	2年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	杉浦 秀行

授業 (指導) 概要・目的	欧米言語文化研究総合演習Ⅰ・Ⅱで培った知識・技能・態度に基づき、各自の研究に必要となるデータ収集、データ・コレクションについて検討していく。修士論文の主要チャプターの内容について、収集したデータに関して徹底した議論を行っていくことで、各自の分析力に磨きをかけていく。
到達目標	・各自の研究テーマにもとづいて、データ収集、データ・コレクションを行う ・各自の主要チャプターの分析・記述を行う
授業方法と留意点	会話分析、相互行為言語学、ジェスチャー研究における緻密な分析、記述についてしっかりと理解し、実践していただきます。
授業 (指導) 計画	第1回目―第15回目：先行研究の検討や収集したデータに基づいて、指導担当者と議論を行い、修士論文の内容をより妥当性のあるものにしていく。
事前・事後学習課題	事前：研究に必要なデータの収集、データ・コレクション、文献調査、主要チャプターの内容の執筆など、修士論文作成に必要な作業を各自で行う。 事後：指導担当者らとの議論を受けて、問題点などを修正する。
評価基準	発表：40% 修士論文の下書きを含めたレポート：60%
教材等	授業中に指示する。
備考	

科目名	欧米言語文化研究総合演習Ⅲ	科目名 (英文)	Seminar on Western Languages and Cultures III
配当年次	2年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	鳥居 祐介

授業 (指導) 概要・目的	欧米言語文化研究総合演習は欧米の地域を中心とした言語・文化・思想・歴史と多岐にわたった領域にまたがっており、各々専門の研究者の指導の下、大学院生として各自の研究テーマにそった指導を受ける。基礎文献・参考文献等、適切な選択をした上で各自のテーマを自分の視点で論文として完成することを目指す。
到達目標	学期終了時には修士論文の一部が執筆されており、完成までに必要な追加の資料収集と執筆の計画が明確になっているようにする。
授業方法と留意点	面談による個別指導となる。受講生は研究ノート、修士論文原稿を毎週書き進める。それらに基づいて指導を行う。
授業 (指導) 計画	週一回の面談指導に従い、研究を進める。
事前・事後学習課題	毎週、少しでも研究、執筆を進めること。
評価基準	70%は平常点。計画的な資料収集、読み込みを行い、個別指導に出席できているかを評価する。 30%は修士論文原稿の一部。学期終了時のものを評価する。
教材等	個別に指定する。
備考	

科目名	欧米言語文化研究総合演習Ⅲ	科目名 (英文)	Seminar on Western Languages and Cultures III
配当年次	2年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	吉村 征洋

授業 (指導) 概要・目的	欧米言語文化研究総合演習Ⅰ,Ⅱで行った研究調査をさらに精査し、研究指導計画にもとづいて、修士論文作成の準備に取りかかる。
到達目標	各自の研究テーマにもとづいて、修士論文の具体的な方向性をもつ。 修士論文の下書きを書き始める。
授業方法と留意点	先行研究の徹底的な読み込みとデータの綿密な収集を行い、修士論文の内容につなげていく。
授業 (指導) 計画	第1回目―第15回目：先行研究の検討や収集した具体例にもとづいて、指導担当者と討論を行い、修士論文の内容をより妥当性のあるものにしていく。
事前・事後学習課題	事前：文献の渉猟と読み込み、具体例の収集など、修士論文作成に必要な作業を各自で行う。 事後：指導担当者との討論を受けて、問題点などを修正する。
評価基準	プレゼンテーション 20% レポート 80%
教材等	授業中に指示する。
備考	

科目名	欧米言語文化研究総合演習Ⅳ	科目名 (英文)	Seminar on Western Languages and Cultures IV
配当年次	2年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	西川 眞由美

授業 (指導) 概要・目的	各指導研究者のもと、基礎文献、参考文献など、適切な選択をしたうえで各自のテーマを自分の視点で論文として完成することを旨指す。
到達目標	修士論文の完成。
授業方法と留意点	各指導研究者の指示に従う。
授業 (指導) 計画	修士論文が完成できるよう、論文の中間発表、完成原稿の校正など、指導研究者との綿密で検討可能な計画を設定する。
事前・事後学習課題	【事前】 資料収集・論文作成など各自に必要な作業を行う。 【事後】 指導教員に指摘された箇所を検討し、修正する。
評価基準	各指導研究者の指示に従う。
教材等	各指導研究者の指示に従う。
備考	

科目名	欧米言語文化研究総合演習Ⅳ	科目名 (英文)	Seminar on Western Languages and Cultures IV
配当年次	2年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	住吉 誠

授業 (指導) 概要・目的	欧米言語文化研究総合演習 III で行った研究調査をさらに精査し、研究指導計画にもとづいて、修士論文を作成し完成させる。
到達目標	修士論文の完成する。 修士論文の内容を口頭で分かりやすくプレゼンテーションできるようになる。
授業方法と留意点	中間発表や完成原稿の綿密な検討など行い、完成度の高い修士論文を執筆する。
授業 (指導) 計画	第1回目～第15回目：先行研究の検討や収集した具体例にもとづいて、指導担当者と討論を行い、修士論文の内容をより妥当性のあるものにしていく。中間発表、完成原稿の検討を重ねて、修士論文を完成させる。
事前・事後学習課題	事前：文献の渉猟と読み込み、具体例の収集など、修士論文作成に必要な作業を各自で行う。 事後：指導担当者ととの討論を受けて、問題点などを修正する。
評価基準	授業中のプレゼンテーション (20%) 中間発表 (20%) 修士論文 (60%)
教材等	授業中に指示する。
備考	

科目名	欧米言語文化研究総合演習Ⅳ	科目名 (英文)	Seminar on Western Languages and Cultures IV
配当年次	2年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	林田 敏子

授業 (指導) 概要・目的	各指導研究者の下、基礎文献・参考文献等、適切な選択をした上で各自のテーマを自分の視点で論文として完成することを目指す。
到達目標	修士論文の完成。
授業方法と留意点	各指導研究者の指示に従う。
授業 (指導) 計画	修士論文が完成できるよう、論文の中間発表、完成原稿の校正等、指導研究者との綿密な検討可能な計画を設定する。
事前・事後学習課題	【事前】 資料収集・論文作成など各自に必要な作業を行う。 【事後】 指導教員に指摘された箇所を検討し、修正する。 (総時間数：60h)
評価基準	授業への取り組み (20%) と論文 (80%) で判断する。
教材等	各指導研究者の指示に従う。
備考	論文作成過程で出される課題については、随時、フィードバックをおこなう。

科目名	欧米言語文化研究総合演習Ⅳ	科目名 (英文)	Seminar on Western Languages and Cultures IV
配当年次	2年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	北條 ゆかり

授業 (指導) 概要・目的	各指導研究者の下、基礎文献・参考文献等、適切な選択をした上で各自のテーマを自分の視点で論文として完成することを目指す。
到達目標	修士論文の完成。
授業方法と留意点	各指導研究者の指示に従う。
授業 (指導) 計画	修士論文が完成できるよう、論文の中間発表、完成原稿の校正等、指導研究者との綿密な検討可能な計画を設定する。
事前・事後学習課題	【事前】資料収集・論文作成など各自に必要な作業を行う。 【事後】指導教員に指摘された箇所を検討し、修正する。 (総時間数：60h)
評価基準	授業への取り組み (20%) と論文 (80%) で判断する。
教材等	各指導研究者の指示に従う。
備考	論文作成過程で出される課題については、随時、フィードバックをおこなう。

科目名	欧米言語文化研究総合演習Ⅳ	科目名 (英文)	Seminar on Western Languages and Cultures IV
配当年次	2年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	齋藤 安以子

授業 (指導) 概要・目的	欧米言語文化研究総合演習は欧米の地域を中心とした言語・文化・思想・歴史と多岐にわたった領域にまたがっており、各々専門の研究者の指導の下、大学院学生として各自の研究テーマにそった指導を受ける。基礎文献・参考文献等、適切な選択をした上で各自のテーマを自分の視点で論文として完成することを目指す。 This course aims to introduce basic research methods and presentation skills for graduate students of art, literature, and education. The main topic of this term is TEFL in Japan.
到達目標	Students will learn - to read academic English and academic Japanese - to keep accurate records - to summarize in English and Japanese - to apply a theory to further analyze data
授業方法と留意点	Workshop
授業 (指導) 計画	Week 1-5 Read the text and discuss in class. Week 6-10 Read the text and try out the findings. Week 11-15 Presentation and essay writing
事前・事後学習課題	TBA
評価基準	final paper 100%
教材等	A. Doiz, D. Lasagabaster & J M Suerra (Eds.) English-Medium Instruction at Universities Multilingual Matters Other references will be introduced at the beginning of the term.
備考	

科目名	欧米言語文化研究総合演習Ⅳ	科目名 (英文)	Seminar on Western Languages and Cultures IV
配当年次	2年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	有馬 善一

授業 (指導) 概要・目的	欧米の思想・文化を研究領域とし、学生各自の研究テーマにそった指導をする。		
到達目標	前期に引き続き、基礎文献・参考文献等、適切な選択をした上で各自のテーマを設定し、基礎的文献を蒐集し、読み進めていく。修士論文の完成。		
授業方法と留意点	少人数の演習形式。与えられた課題に対する報告が主な内容となる。		
授業 (指導) 計画	入学当初に提出した各自の研究テーマと研究計画を踏まえ、各指導教員の指導のもとに研究倫理のあり方を理解し、各自が研究資料の調査・収集等の予備的作業を行ない、討論・発表を通じて、研究遂行に必要な諸技能を修得する。 中間発表の成果を踏まえて、修士論文の完成を目指す。草稿に対する指導を行う。		
事前・事後学習課題	事前事後学習に最低 60 時間ずつ必要。		
評価基準	平常点 (20%) と修士論文 (80%) で評価する。		
教材等	受講生のテーマに沿ったものを教示する。		
備考	有馬研究室は 7 号館 4 階		

科目名	欧米言語文化研究総合演習Ⅳ	科目名 (英文)	Seminar on Western Languages and Cultures IV
配当年次	2年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	杉浦 秀行

授業 (指導) 概要・目的	欧米言語文化研究総合演習Ⅰ・Ⅱで培った知識・技能・態度に基づき、各自の修士論文の内容について検討していく。各自の修士論文の内容について収集したデータに基づき、徹底した議論を行っていくことで、各自の修士論文完成に向けて分析・記述内容に磨きをかけていく。		
到達目標	・各自の修士論文の分析・記述内容を深める ・各自の修士論文の分析・記述内容の問題点を把握し、改善する		
授業方法と留意点	会話分析、相互行為言語学、ジェスチャー研究における緻密な分析、記述についてしっかりと理解し、実践していただきます。		
授業 (指導) 計画	第 1 回目ー第 15 回目：修士論文の分析・記述内容について、指導担当者らと議論を行い、修士論文の内容をより妥当性のあるものにしていく。		
事前・事後学習課題	事前：修士論文の完成に向けて、分析・記述内容の修正や精緻化を各自で行う。 事後：指導担当者らとの議論を受けて、分析・記述内容、文献一覧表などを各自で修正する。		
評価基準	発表： 40% 修士論文の内容： 60%		
教材等	授業中に指示する。		
備考			

科目名	欧米言語文化研究総合演習Ⅳ	科目名 (英文)	Seminar on Western Languages and Cultures IV
配当年次	2年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	鳥居 祐介

授業 (指導) 概要・目的	欧米言語文化研究総合演習は欧米の地域を中心とした言語・文化・思想・歴史と多岐にわたった領域にまたがっており、各々専門の研究者の指導の下、大学院学生として各自の研究テーマにそった指導を受ける。基礎文献・参考文献等、適切な選択をした上で各自のテーマを自分の視点で論文として完成することを目指す。		
到達目標	修士論文を完成させ、口頭試問等の審査に合格できるように準備する。		
授業方法と留意点	面談による個別指導となる。修士論文原稿を毎週書き進める。それらに基づいて指導を行う。		
授業 (指導) 計画	週一回の面談指導に従い、研究と執筆を進める。		
事前・事後学習課題	毎週、少しでも研究、執筆を進めること。		
評価基準	70% 修士論文原稿の評価 30% 口頭試問の評価		
教材等	個別に指定する。		
備考			

科目名	欧米言語文化研究総合演習Ⅳ	科目名 (英文)	Seminar on Western Languages and Cultures IV
配当年次	2年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	吉村 征洋

授業 (指導) 概要・目的	欧米言語文化研究総合演習 III で行った研究調査をさらに精査し、研究指導計画にもとづいて、修士論文を作成し完成させる。
到達目標	修士論文の完成させること
授業方法と留意点	中間発表や完成原稿の綿密な検討など行い、完成度の高い修士論文を執筆する。
授業 (指導) 計画	第1回目～第15回目：先行研究の検討や収集した具体例にもとづいて、指導担当者と討論を行い、修士論文の内容をより妥当性のあるものにしていく。中間発表、完成原稿の検討を重ねて、修士論文を完成させる。
事前・事後学習課題	事前：文献の渉猟と読み込み、具体例の収集など、修士論文作成に必要な作業を各自で行う。 事後：指導担当者との討論を受けて、問題点などを修正する。
評価基準	中間発表 20% 修士論文 80%
教材等	授業中に指示する。
備考	

科目名	アジア言語文化特論ⅠA	科目名 (英文)	Topics in Asian Languages and Cultures I A
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	中西 正樹

授業 (指導) 概要・目的	前期授業のAでは、中国における漢字の誕生から現代までの変遷をたどるとともに、朝鮮や日本、ベトナムに伝わりそれぞれの言語や文化に取り込まれ、それぞれ独自の発展を遂げたありさまを学ぶ。
到達目標	アジアにおける文化や政治、経済に漢字が果たしてきた役割を知るとともに、現代の日本と中国の間で漢字や漢字語がどのように往来しているかを理解する。
授業方法と留意点	教科書などの予習復習を十分におこなうほか、自主的に参考文献を図書館などで探し調査閲覧すること。
授業 (指導) 計画	教科書のほか授業概要・目的の内容とあう論文を選び、講読していく。調査した結果はレポートにまとめるほか、パワーポイントなどにまとめて発表する。
事前・事後学習課題	各回の指定教材をあらかじめ通読し、内容をまとめておくこと。重要な事項は事前に調べておくこと。
評価基準	発表およびレポート。
教材等	藤堂明保『漢字とその文化圏 中国語研究学習双書3』(光生館)
備考	

科目名	アジア言語文化特論ⅠB	科目名 (英文)	Topics in Asian Languages and Cultures I B
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	兪 鳴蒙

授業 (指導) 概要・目的	中国伝統文化の思考様式、生活文化、精神文化及び中国語表現の視点から、中国言語文化を検討し、その実相を把握することを目的とする。
到達目標	中国文化のあり方をよく理解し、国際的なセンスを高める。
授業方法と留意点	大学院の授業であるから、教科書などの予習復習を十分に行うほか、自主的に参考文献を図書館などで探し調査閲覧すること。
授業 (指導) 計画	授業概要・目的の内容と合うテキストを選び、講読していく。
事前・事後学習課題	各回の指定教材をあらかじめ通読し、内容を把握しておくこと。重要な事項は事前に調べておくこと。
評価基準	受講状況およびレポート。
教材等	『対話中国・物態文化篇』、『対話中国・心態文化篇』(張健、董萃 主編、北京言語大学出版社、2013～2014)
備考	

科目名	アジア言語文化特論ⅡA	科目名 (英文)	Topics in Asian Languages and Cultures II A
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	浦野 崇央

授業 (指導) 概要・目的	インドネシアと日本の関係性を中心に研究する。研究の対象は、インドネシアー日本の人的交流・物的交流、あるいはインドネシアにおける日本語学習状況、日本におけるインドネシア語学修状況など、さまざまである。この講義では、特に日本とインドネシアの関係性における特徴的な傾向を把握し、その共通点と相違点を探る。
到達目標	インドネシアと日本の関係性の探究を通じて、グローバル世界での位置づけが把握できる。
授業方法と留意点	予習を必ずしてくること。
授業 (指導) 計画	授業概要・目的の内容と合致する論文 (日本語・インドネシア語・英語) を選び、講読していく。
事前・事後学習課題	各回の指定教材をあらかじめ通読し、内容をまとめておくこと。重要な事項は事前に調べておくこと。
評価基準	受講状況 (20%) およびレポートの内容 (80%)
教材等	配布プリント
備考	

科目名	アジア言語文化特論ⅡB	科目名(英文)	Topics in Asian Languages and Cultures II B
配当年次	1年	単位数	2
学期(開講期)	後期	授業担当者	浦野 崇央

授業(指導)概要・目的	東アジア言語文化特論ⅡA(前期)の授業内容を発展させ、引き続き、日本とインドネシアの関係性について探究する。
到達目標	インドネシアと日本の関係性の探究を通じて、グローバル世界での位置づけが把握できる。
授業方法と留意点	予習を必ずしておくこと。
授業(指導)計画	授業概要・目的の内容と合致する論文(日本語・インドネシア語・英語)を選び、講読していく。
事前・事後学習課題	各回の指定教材をあらかじめ通読し、内容をまとめておくこと。重要な事項は事前に調べておくこと。
評価基準	受講状況(20%)およびレポート(80%)
教材等	配布プリント資料
備考	

科目名	アジア言語文化特論ⅢA	科目名(英文)	Topics in Asian Languages and Cultures III A
配当年次	1年	単位数	2
学期(開講期)	前期	授業担当者	山口 真佐夫

授業(指導)概要・目的	この授業では、ヨーロッパにおいて始まった比較言語学の歴史を概観し、その後他の地域の言語に対してどのように応用されてきたかを概観する、また、研究方法を紹介する。さらに音韻対応、故地等の比較言語学で扱われるテーマについても紹介する。語彙統計学、言語年代学についても基礎的な説明を行う。
到達目標	言語学の一分野である比較言語学に関する基本的知識の習得できる。
授業方法と留意点	授業中に受講者の意見を求めるので、意欲的に発言してもらいたい。
授業(指導)計画	まず、比較言語学の歴史、発展を概観する。その後、比較言語学の研究方法の基礎、関連するテーマを説明する。
事前・事後学習課題	指示された予習、復習を必ずするように。 最終回の発表に備え、準備を行っておくこと。
評価基準	授業への参加度(発言など)と発表。 参加度60%、発表40%
教材等	プリントを用意する。
備考	発表については終了後コメントする。

科目名	アジア言語文化特論ⅢB	科目名(英文)	Topics in Asian Languages and Cultures III B
配当年次	1年	単位数	2
学期(開講期)	後期	授業担当者	山口 真佐夫

授業(指導)概要・目的	オーストロネシア語族、西部マライポリネシア語派の言語を例に比較言語学の目的である祖語の再構(再建)を行う。さらに比較言語学に基づいて言語の系統についての研究を行う。なお、比較言語学以外にも対照言語学、言語人類学等の周辺分野についても説明する。
到達目標	比較言語学の基本的な作業である音韻比較、祖語の再構(再建)についての知識を習得できる。 比較言語学の周辺分野についても知識を得ることができる。
授業方法と留意点	授業中に受講者の意見を求めるので、意欲的に発言してもらいたい。
授業(指導)計画	オーストロネシア語族・西部マライポリネシア語派に属する言語についての知識を得た上で、実際に祖語の再建を行う。また、適宜周辺分野に付いての説明を行う。
事前・事後学習課題	指示された予習、復習を必ずするように。 最終回の発表に備え、準備を行っておくこと。
評価基準	授業への参加度(発言など)と発表。 参加度60%、発表40%
教材等	プリントを用意する。
備考	発表については終了後コメントする。

科目名	アジア言語文化特論ⅣA	科目名 (英文)	Topics in Asian Languages and Cultures IV A
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	小川 豊生

授業 (指導) 概要・目的	日本の言語文化をかたちづくる本質的特性を把握するうえで、文学領域に対する理解は不可欠である。日本における伝統的なものの形成について、典型的な作品の読解を通じてその認識を深め、自ら論理化・言語化する力を養成する。日本の文学作品が中心となるが、東アジアや欧米の作品も視野に入れつつ、比較文化史的な視点からすすめていきたい。
到達目標	日本の文学伝統の総合的把握と、個別作品に対する読解力の養成。
授業方法と留意点	とりあげる作品については、受講生の関心に即して設定する。
授業 (指導) 計画	1 対象とするテキストの設定 2 作品の全体像の把握 (古典作品の場合は現代語訳・入門書等を参照する) 3 読解対象とする個所の絞り込み 4 作品研究に有益な文献・論文の収集と読み込み 5 独自のテーマにもとづくレポートの作成
事前・事後学習課題	上記の流れに即して、課題を提出する。 作品読解の範囲の割り当てに即して、事前調査 (語彙の解釈、文意の検討) を行う。
評価基準	受講態度およびレポートによる評価。
教材等	授業時に指示する。
備考	

科目名	アジア言語文化特論ⅣB	科目名 (英文)	Topics in Asian Languages and Cultures IV B
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	小川 豊生

授業 (指導) 概要・目的	日本の言語文化をかたちづくる本質的特性を把握するうえで、文学領域に対する理解は不可欠である。日本における伝統的なものの形成について、典型的な作品の読解を通じてその認識を深め、自ら論理化・言語化する力を養成する。日本の文学作品が中心となるが、東アジアや欧米の作品も視野に入れつつ、比較文化史的な視点からすすめていきたい。
到達目標	日本の文学伝統の総合的把握と、個別作品に対する読解力の養成。
授業方法と留意点	とりあげる作品については、受講生の関心に即して設定する。
授業 (指導) 計画	1 対象とするテキストの設定 2 作品の全体像の把握 (古典作品の場合は現代語訳・入門書等を参照する) 3 読解対象とする個所の絞り込み 4 作品研究に有益な文献・論文の収集と読み込み 5 独自のテーマにもとづくレポートの作成
事前・事後学習課題	上記の流れに即して、課題を提出する。 作品読解の範囲の割り当てに即して、事前調査 (語彙の解釈、文意の検討) を行う。
評価基準	受講態度およびレポートによる評価。
教材等	授業時に指示する。
備考	

科目名	アジア言語文化特論ⅤA	科目名 (英文)	Topics in Asian Languages and Cultures V A
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	橋本 正俊

授業 (指導) 概要・目的	《日本語学・日本文学》 日本語学・日本文学に関する様々な文献を取り上げて論じる。 特に『今昔物語集』を取り上げ、その日本語表現、文学表現について論じる。 あわせて、中世の辞書や、研究文献も取り上げて、日本語・日本文学研究の問題点について考察する。 中世の文学作品を通して、日本語・日本文学についての正確な知識を得ることを目的とする。
到達目標	日本語・日本文学文献の表記、表現について、正確に説明し、考察することができる。
授業方法と留意点	資料及び文献を講読し、論じる。
授業 (指導) 計画	資料について調べ、講読する。 講義をし、その特徴、注目すべき点について論じる。 課題を提出する。
事前・事後学習課題	・事前に購読予定の資料を通読の上、疑問点をまとめておく。 ・課題の作成。 (合計 30 h)
評価基準	受講状況および課題等により総合的に評価する。
教材等	授業時に指示する。
備考	

科目名	アジア言語文化特論V B	科目名 (英文)	Topics in Asian Languages and Cultures V B
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	橋本 正俊

授業 (指導) 概要・目的	《日本語・日本文学》 日本語学・日本文学に関する様々な文献を取り上げて論じる。 特に室町時代の短編物語を取り上げ、その日本語表現・文学表現について論じる。 あわせて、中世の辞書や、研究文献も取り上げて、日本語・日本文学研究の問題点について考察する。 中世の文学作品を通して、日本語・日本文学についての正確な知識を得ることを目的とする。
到達目標	日本語文献の表記、表現について、正確に説明し、考察することができる。
授業方法と留意点	資料及び文献を講読し、論じる。
授業 (指導) 計画	資料について調べ、講読する。 講義をし、その特徴、注目すべき点について論じる。 課題を提出する。
事前・事後学習課題	・事前に購読予定の資料を通読の上、疑問点をまとめておく。 ・課題の作成。 (合計 30h)
評価基準	受講状況および課題等により総合的に評価する。
教材等	授業時に指示する。
備考	

科目名	アジア言語文化特論VIA	科目名 (英文)	Topics in Asian Languages and Cultures VI A
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	門脇 薫

授業 (指導) 概要・目的	第2言語としての日本語の習得研究の観点から、日本語教育に関わる種々の問題を見ていく。具体的には、第2言語習得 (Second Language Acquisition: SLA) の理論、外国人学習者の日本語の習得過程、日本語の習得研究、第2言語習得研究と日本語指導等について取り上げる。
到達目標	言語習得研究、及び語学教育に関する知識を得、日本語及び資料を分析する力を養う。
授業方法と留意点	文献及び資料を講読し、諸問題について討論する。また各自の課題発表について意見交換を行う。
授業 (指導) 計画	文献及び資料の講読・討論・課題に関する調査分析及び発表
事前・事後学習課題	指定された文献及び資料を読み、論点を把握し授業で議論ができるよう自分なりの考えをまとめておく。発表担当者はレジュメを作成し発表準備を行う。授業後は授業での意見交換した内容をふまえてまとめのレポートを書く。(合計 30h)
評価基準	授業における討論 (10%)・発表 (30%)・レポート (60%) 等により総合的に評価する。
教材等	授業時に指示する。
備考	

科目名	アジア言語文化特論VIB	科目名 (英文)	Topics in Asian Languages and Cultures VI B
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	門脇 薫

授業 (指導) 概要・目的	第2言語としての日本語の習得研究の観点から、日本語教育に関わる種々の問題を見ていく。具体的には、第2言語習得 (Second Language Acquisition: SLA) の理論、外国人学習者の日本語の習得過程、日本語の習得研究、第2言語習得研究と日本語指導等について取り上げる。
到達目標	言語習得及び語学教育に関する知識を得、日本語及び資料を分析する力を養う。
授業方法と留意点	文献及び資料を講読し、諸問題について討論する。また各自の課題発表について意見交換を行う。
授業 (指導) 計画	文献及び資料の講読・討論・課題に関する調査分析及び発表
事前・事後学習課題	関連するテーマについて文献・資料収集を行う。授業前に文献及び資料を読み、論点を把握し授業で議論ができるよう自分なりの考えをまとめておく。発表担当者はレジュメを作成し発表準備を行う。授業後は授業での意見交換した内容をふまえてまとめのレポートを書く。(合計 30h)
評価基準	授業における討論 (10%)・発表 (30%)・レポート (60%) 等により総合的に評価する。
教材等	授業時に指示する。
備考	

科目名	アジア地域文化特論 I A	科目名 (英文)	Topics in Asian Regions and Cultures I A
配当年次	1 年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	浅野 英一

授業 (指導) 概要・目的	開発学に関する様々な文献を取り上げて論じる。 特に『地域開発』を取り上げ、その課題について論じる。 あわせて、様々な研究文献も取り上げて、研究の問題点について考察する。 ケーススタディや過去の取り組みについての正確な知識を得ることを目的とする。
到達目標	開発学文献の表記、表現について、正確に説明し、考察することができる。
授業方法と留意点	資料及び文献を講読し、論じる。
授業 (指導) 計画	資料について調べ、講読する。 講義をし、その特徴、注目すべき点について論じる。 課題を提出する。
事前・事後学習課題	・事前に購読予定の資料を通読の上、疑問点をまとめておく。 ・課題の作成。 (合計 30 h)
評価基準	受講状況および課題等により総合的に評価する。
教材等	授業時に指示する。
備考	

科目名	アジア地域文化特論 I B	科目名 (英文)	Topics in Asian Regions and Cultures I B
配当年次	1 年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	浅野 英一

授業 (指導) 概要・目的	開発学に関する様々な文献を取り上げて論じる。 特に『地域開発』を取り上げ、その課題について論じる。 あわせて、様々な研究文献も取り上げて、研究の問題点について考察する。 ケーススタディや過去の取り組みについての正確な知識を得ることを目的とする。
到達目標	開発学文献の表記、表現について、正確に説明し、考察することができる。
授業方法と留意点	資料及び文献を講読し、論じる。
授業 (指導) 計画	資料について調べ、講読する。 講義をし、その特徴、注目すべき点について論じる。 課題を提出する。
事前・事後学習課題	・事前に購読予定の資料を通読の上、疑問点をまとめておく。 ・課題の作成。 (合計 30 h)
評価基準	受講状況および課題等により総合的に評価する。
教材等	授業時に指示する。
備考	

科目名	アジア地域文化特論ⅡA	科目名(英文)	Topics in Asian Regions and Cultures II A
配当年次	1年	単位数	2
学期(開講期)	前期	授業担当者	上田 達

授業(指導)概要・目的	文化人類学における理解がどのようなものであるかを示すことを、講義の主たる目的とする。まず、初期の文化人類学から今日にいたる学問の歴史を俯瞰しつつ、そのなかで採用されてきた理解の枠組みを素描する。そのうえで、受講者の関心も聞きながら具体的なトピックを選んで、その民族誌的な成果や意義について検討する。 授業は主に講義形式で行う。参考となる文献をあらかじめ配布するので、読んできたことを前提として内容について解説と補足を行う。また、受講者には文献の内容について報告する機会を適宜設ける。参考文献の詳細は初回の授業時に指示するが、中心となるのは以下のものである。
到達目標	文化人類学的なものの見方ができるようになることと、自らそれを用いて考えられるようになることを目指す。
授業方法と留意点	講義と受講者との文献の講読で進める。文献は日本語のものと英語のものを用いる。受講者には事前と事後の課題を出すので、積極的に取り組むことが求められる。
授業(指導)計画	1. イントロダクション 2. 文化人類学のはじまり 3. 文化人類学の展開 4. 事例研究---親族 5. 事例研究---呪術と宗教 6. 文化人類学の展開 7. 事例研究---贈与、経済 8. 文化人類学の展開 9. 文化人類学と植民地主義 10. 事例研究---政治 11. 文化人類学の洗練 12. 事例研究---儀礼 13. 文化人類学と近代社会 14. 事例研究---都市 15. まとめ
事前・事後学習課題	事前: 受講者は指定する文献(和文・英文)を予め読んでくること。授業時に文献に記されていることの理解度を問う課題を出す。事後: 既習事項を確認するとともに、講義中に言及した文献の該当箇所について読むこと。
評価基準	授業への参加とレポートによる。詳細は初回の授業時に指示する。
教材等	授業時に配布する資料を用いる。参考文献については初回に詳細を指示する。
備考	

科目名	アジア地域文化特論ⅡB	科目名(英文)	Topics in Asian Regions and Cultures II B
配当年次	1年	単位数	2
学期(開講期)	後期	授業担当者	上田 達

授業(指導)概要・目的	文化人類学における理解がどのようなものであるかを示すことを、講義の主たる目的とする。いくつかの現代的なトピックを検討することを通じて、文化人類学の理解の特質や現代におけるその意義を示す。 授業は講義を中心とする。参考となる文献をあらかじめ配布するので、読んできたことを前提として内容について解説と補足を行う。また、受講者には内容について報告する機会を設ける。
到達目標	文化人類学的なものの見方ができるようになることと、自らそれを用いて考えられるようになることを目指す。
授業方法と留意点	講義と受講者との文献の講読で進める。文献は日本語のものと英語のものを用いる。受講者には事前と事後の課題を出すので、積極的に取り組むことが求められる。
授業(指導)計画	1. イントロダクション 2. 文化人類学とは何か 3. 文化人類学と隣接する諸領域 4. 文化人類学の到達地点 5. 事例研究 政治---文献講読 6. 事例研究 政治---講義 7. 事例研究 市場---文献講読 8. 事例研究 市場---講義 9. 事例研究 開発---文献講読 10. 事例研究 開発---講義 11. 事例研究 医療---文献講読 12. 事例研究 医療---講義 13. 事例研究 自然と文化---文献講読 14. 文化人類学における理解 15. まとめ
事前・事後学習課題	事前: 受講者は指定する文献(和文・英文)を予め読んでくること。授業時に文献に記されていることの理解度を問う課題を出す。事後: 既習事項を確認するとともに、講義中に言及した文献の該当箇所について読むこと。
評価基準	授業への参加とレポートによる。詳細は初回の授業時に指示する。
教材等	授業時に配布する資料を用いる。参考文献については初回に詳細を指示する。
備考	

科目名	アジア地域文化特論ⅢA	科目名 (英文)	Topics in Asian Regions and Cultures III A
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	岩間 香

授業 (指導) 概要・目的	芸術は作者、時代、思想などさまざまな要素から成り立っている。この講義では各時代の代表的な作品を鑑賞しながら、どのような社会状況のもとに生み出されたのか、何に用いられたのか、主題はなにか、技法や技術の完成度はどうかなどを解説する。日本の美術や文化を知ることが、人生を豊かにするだけでなく、グローバル社会において自分を支える力になるだろう。
到達目標	日本美術の基本的な知識を修得する。教養として必要な程度の知識を身につけるとともに、美術や歴史への関心を高める。
授業方法と留意点	講義は常時スライドや教材表示装置を使用する。必要に応じノートに書き留めてもらいたい。
授業 (指導) 計画	1～2回：奈良時代の美術 法隆寺、東大寺、興福寺 2～5回：平安時代の美術 密教美術、絵巻物、平等院 6～7回：鎌倉時代の美術 運慶、似絵、絵巻物 8回：室町時代の美術 水墨画 9回：桃山時代の美術 金碧障壁画、狩野永徳 10～15回：江戸時代の美術 琳派、狩野派、浮世絵
事前・事後学習課題	事前：毎回、次の回の教材を渡すので、事前にその時代の歴史を調べておく。また取り上げる美術作品をWEBや本で見ておく。(毎回90分) 事後：講義に出てきた作品の画像を集め、ノートをまとめる。不明な点を調べる。
評価基準	レポート
教材等	そのつどプリントを渡す
備考	京都・奈良の寺院や展覧会に足を運び、本物の美術に触れることを勧めます。

科目名	アジア地域文化特論ⅢB	科目名 (英文)	Topics in Asian Regions and Cultures III B
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	岩間 香

授業 (指導) 概要・目的	この講義では日本の絵画が西洋画をいかに受容してきたかをみる。作品を鑑賞しながら、どのような社会背景のもとに受容されたのか、何に用いられたのか、主題はなにか、技法や技術の完成度はどうかなどを解説する。日本の伝統的な絵画と西洋の美術の出会いを知ることは、社会・歴史・文化において広い視野を得ることになるだろう。
到達目標	日本美術の基本的な知識を修得する。教養として必要な程度の知識を身につけるとともに、美術や歴史への関心を高める。
授業方法と留意点	講義は常時スライドや教材表示装置を使用する。必要に応じノートに書き留めてもらいたい。
授業 (指導) 計画	1～2回：桃山時代 南蛮美術 3～5回：江戸時代初期 南蛮趣味 6～8回：江戸時代中期 円山応挙と西洋の遠近法 9～10回：江戸時代中期 司馬江漢と秋田蘭画 11～15回：江戸時代後期 浮世絵に見る西洋画法
事前・事後学習課題	事前：毎回、次の回の教材を渡すので、事前にその時代の歴史を調べておく。また取り上げる美術作品をWEBや本で見ておく。(毎回90分) 事後：講義に出てきた作品の画像を集め、ノートをまとめる。不明な点を調べる。
評価基準	レポート
教材等	そのつどプリントを渡す
備考	美術館や博物館に足を運び、本物の美術に触れることを勧めます。

科目名	アジア地域文化特論ⅣA	科目名 (英文)	Topics in Asian Regions and Cultures IV A
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	赤澤 春彦

授業 (指導) 概要・目的	日本の歴史を理解すること、また文献史学の方法論を修得することを目的とする。日本の歴史にかかる重要な論点を整理・評価し、古文書や古記録などの具体的な史料に基づいて検討する。本講義では、古代から中世の代表的な学説をいくつか取り上げて講読し、その学説にかかわる史料を取り上げて再検討する。
到達目標	日本史の理解と文献史学の方法論を修得する。 史料の読解力を身につける。
授業方法と留意点	日本古代から中世にかかる重要な文献や史料を講読し、論点を整理する。 教員との質疑応答を通して理解を深める。
授業 (指導) 計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 古代王権と天皇家 2. 律令国家の形成 3. 律令制の解体と摂関政治・官司請負制 4. 院政 5. 武士論 6. 鎌倉幕府論 7. 荘園制 8. 古代～中世前期における宗教 9. 室町幕府と守護領国制 10. 戦国大名論 11. 対外関係論 12. 交通・流通と貨幣経済の展開 13. 都市論 14. 生活史 15. 総論 日本における古代・中世の特質
事前・事後学習課題	事前：教員が指定する文献・史料を講読してレジюмеにまとめる。 事後：教員との質疑応答を通して気付いたことなどをレポートにまとめる。
評価基準	報告とレポート
教材等	適宜プリントを配布する
備考	

科目名	アジア地域文化特論ⅣB	科目名 (英文)	Topics in Asian Regions and Cultures IV B
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	赤澤 春彦

授業 (指導) 概要・目的	日本の歴史を理解すること、また文献史学の方法論を修得することを目的とする。日本の歴史にかかる重要な論点を整理・評価し、古文書や古記録などの具体的な史料に基づいて検討する。本講義では、古代から中世の代表的な学説をいくつか取り上げて講読し、その学説にかかわる史料を取り上げて再検討する。
到達目標	日本史の理解と文献史学の方法論を修得する。 史料の読解力を身につける。
授業方法と留意点	日本近世から近代にかかる重要な文献や史料を講読し、論点を整理する。 教員との質疑応答を通して理解を深める。
授業 (指導) 計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 織豊政権論 2. 織豊期の対外関係 3. 幕藩体制論 4. 近世身分論 5. 都市と村落 6. 流通と交通 7. 文化と教育 8. 明治維新と近代化 9. 明治国家と日清・日露戦争 10. 立憲主義と帝国主義 11. 大正期の民衆運動 12. 近代の教育制度と学問 13. 2つの大戦と国民 14. 戦後史 15. 総論 日本における近世・近代の特質
事前・事後学習課題	事前：教員が指定する文献・史料を講読してレジюмеにまとめる。 事後：教員との質疑応答を通して気付いたことなどをレポートにまとめる。
評価基準	報告とレポート
教材等	適宜プリントを配布する
備考	

科目名	アジア地域文化特論 V A	科目名 (英文)	Topics in Asian Regions and Cultures V A
配当年次	1 年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	原 秀禎

授業 (指導) 概要・目的	<ul style="list-style-type: none"> この講義では、東アジア地域の中から「日本」を取り上げ、日本の地域性について分析する。 日本を、北海道・東北・関東・中部・近畿・中国・四国・九州地方に分けて、それぞれの地域が持つ特色をまとめる。 前期では九州・中国・四国・近畿地方について、地誌的資料をもとに分析していく。
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> 日本の地域性について、各地方ごとの特色を総括する。 前期は、九州・中国・四国・近畿地方の4地方の地域性を理解する。
授業方法と留意点	講義を中心に、地誌的資料をもとに各j地方について分析していく。
授業 (指導) 計画	各地方ごとに、以下の順序で分析していく。 <ol style="list-style-type: none"> ①歴史的背景 ②自然的基礎 ③人口 ④村落 ⑤第一次産業 ⑥第二次産業 ⑦都市 ⑧交通 ⑨観光 ⑩地域区分
事前・事後学習課題	<ul style="list-style-type: none"> 事前に各回の資料を配付するので、講義前に熟読し、問題点を整理しておく。 各回の講義終了後には、その内容をまとめ、レポートとして次回の講義時に提出する。
評価基準	レポート内容と講義への取り組み姿勢によって総合的に評価する。
教材等	適宜、講義中に配布する。
備考	

科目名	アジア地域文化特論 V B	科目名 (英文)	Topics in Asian Regions and Cultures V B
配当年次	1 年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	原 秀禎

授業 (指導) 概要・目的	<ul style="list-style-type: none"> この講義では、東アジア地域の中から「日本」を取り上げ、日本の地域性について分析する。 日本を、北海道・東北・関東・中部・近畿・中国・四国・九州地方に分けて、それぞれの地域が持つ特色をまとめる。 後期では中部・関東・東北・北海道の各地方について、地誌的資料をもとに分析していく。
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> 日本の地域性について、各地方ごとの特色を総括する。 後期は、中部・関東・東北・北海道の4地方を取り上げ、各地方の地域性を理解する。
授業方法と留意点	講義を中心に、地誌的資料をもとに各j地方について分析していく。
授業 (指導) 計画	各地方ごとに、以下の順序で分析する。 <ol style="list-style-type: none"> ①歴史的背景 ②自然的基礎 ③人口 ④村落 ⑤第一次産業 ⑥第二次産業 ⑦都市 ⑧交通 ⑨観光 ⑩地域区分
事前・事後学習課題	<ul style="list-style-type: none"> 事前に各回の資料を配付するので、講義前に熟読し、問題点を整理しておく。 各回の講義終了後には、その内容をまとめ、レポートとして次回の講義時に提出する。
評価基準	レポート内容と講義への取り組み姿勢によって総合的に評価する。
教材等	適宜、講義中に配布する。
備考	

科目名	アジア言語文化研究総合演習 I	科目名 (英文)	Seminar on Asian Languages and Cultures I
配当年次	2 年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	山口 真佐夫

授業 (指導) 概要・目的	各自の研究テーマと研究計画を踏まえ、各自が研究資料の調査・収集等の予備的作業を行なう。なお、本授業では研究倫理についても説明を行う。
到達目標	研究遂行に必要な諸技能を修得する。
授業方法と留意点	発表、質疑応答、意見交換を行う。
授業 (指導) 計画	各自のテーマに応じて、研究を進める。
事前・事後学習課題	充分時間をかけ指示された予習、復習をすること。
評価基準	授業への参加度 (発言など) と発表。 参加度 60%、発表 40%
教材等	適宜指示する。
備考	発表については終了後コメントする。

科目名	アジア言語文化研究総合演習Ⅰ	科目名(英文)	Seminar on Asian Languages and Cultures I
配当年次	2年	単位数	2
学期(開講期)	前期	授業担当者	門脇 薫

授業(指導)概要・目的	入学当初に提出した各自の研究テーマと研究計画を踏まえ、指導教員の指導のもとに、各自が研究資料の調査・収集等の予備的作業を行ない、討論・発表を通じて、研究遂行に必要な諸技能を修得する。
到達目標	修士論文作成のための下準備。 論文作成や資料収集における研究倫理のあり方を理解する。
授業方法と留意点	指導教員の指示に従う。
授業(指導)計画	指導教員の指示に従う。
事前・事後学習課題	【事前】資料収集・論文作成など各自に必要な作業を行う。 【事後】指導教員に指摘された箇所を検討し修正する。
評価基準	指導教員の指示に従う。
教材等	指導教員の指示による。
備考	【指導担当者】 門脇 薫 (研究室 7号館4階)

科目名	アジア言語文化研究総合演習Ⅰ	科目名(英文)	Seminar on Asian Languages and Cultures I
配当年次	2年	単位数	2
学期(開講期)	前期	授業担当者	浅野 英一

授業(指導)概要・目的	入学当初に提出した各自の研究テーマと研究計画を踏まえ、各指導教員の指導のもとに研究倫理のあり方を理解し、各自が研究資料の調査・収集等の予備的作業を行ない、討論・発表を通じて、研究遂行に必要な諸技能を修得し、修士論文を作成する。
到達目標	修士論文作成に向けての基礎作業を行う。
授業方法と留意点	受講者は調査及び考察した内容について発表する。 それについて教員との意見交換を通して研究を進める。
授業(指導)計画	基礎的な調査を通じて修士論文の大きなテーマを決める。
事前・事後学習課題	取り組むべき作業を進める。 事前・事後学習時間60h
評価基準	研究への取り組み(100%)
教材等	
備考	

科目名	アジア言語文化研究総合演習Ⅰ	科目名(英文)	Seminar on Asian Languages and Cultures I
配当年次	2年	単位数	2
学期(開講期)	前期	授業担当者	上田 達

授業(指導)概要・目的	修士論文作成のための指導を行う。受講者の関心に基づいて研究主題を設定した上で、関連する文献資料を収集して講義に努める。
到達目標	調査研究を進める上で必要な技法を修得することを目標とする。
授業方法と留意点	受講者には毎回課題を出すので、意欲的に取り組むことが求められる。
授業(指導)計画	第1回 オリエンテーション 第2回～第14回 文献講読、資料分析、ディスカッション 第15回 まとめ
事前・事後学習課題	受講者の関心を聞いた上で、講読する文献(和文、英文)を決定する。受講者は毎回の授業で、一定分量の指定文献を読んできた上で、その内容についての報告を求める。
評価基準	毎回の授業課題への取り組み(20%)および期末に課す最終レポート(80%)によって評価する。
教材等	初回授業時に指示する。
備考	

科目名	アジア言語文化研究総合演習Ⅰ	科目名(英文)	Seminar on Asian Languages and Cultures I
配当年次	2年	単位数	2
学期(開講期)	前期	授業担当者	橋本 正俊

授業(指導)概要・目的	入学当初に提出した各自の研究テーマと研究計画を踏まえ、各指導教員の指導のもとに研究倫理のあり方を理解し、各自が研究資料の調査・収集等の予備的作業を行ない、討論・発表を通じて、研究遂行に必要な諸技能を修得し、修士論文を作成する。
到達目標	修士論文作成に向けての基礎作業を行う。
授業方法と留意点	受講者は調査及び考察した内容について発表する。 それについて教員との意見交換を通して研究を進める。
授業(指導)計画	基礎的な調査を通じて修士論文の大きなテーマを決める。
事前・事後学習課題	取り組むべき作業を進める。 事前・事後学習時間60h
評価基準	研究への取り組み(100%)
教材等	
備考	

科目名	アジア言語文化研究総合演習Ⅰ	科目名(英文)	Seminar on Asian Languages and Cultures I
配当年次	2年	単位数	2
学期(開講期)	前期	授業担当者	赤澤 春彦

授業(指導)概要・目的	入学当初に提出した各自の研究テーマと研究計画を踏まえ、各指導教員の指導のもとに研究倫理のあり方を理解し、各自が研究資料の調査・収集等の予備的作業を行ない、討論・発表を通じて、研究遂行に必要な諸技能を修得し、修士論文を作成する。
到達目標	修士論文の作成に向けた準備を行う。
授業方法と留意点	受講者は研究内容をレジュメにまとめ発表する。 質疑応答を行い研究を深める。
授業(指導)計画	大枠のテーマを設定して、関連論文を講読し、研究史上の問題点を探る。 テーマにかかる資料を収集し、解読、考察を進める。
事前・事後学習課題	事前・事後学習時間60hを目安とし、継続的に研究を進める。
評価基準	報告と年度末レポート
教材等	
備考	

科目名	アジア言語文化研究総合演習Ⅱ	科目名(英文)	Seminar on Asian Languages and Cultures II
配当年次	2年	単位数	2
学期(開講期)	後期	授業担当者	山口 真佐夫

授業(指導)概要・目的	各自の研究テーマと研究計画を踏まえ、各自が研究資料の調査・収集等の予備的作業を行なう。
到達目標	研究遂行に必要な諸技能を修得する。
授業方法と留意点	発表、質疑応答、意見交換を行う。
授業(指導)計画	各自のテーマに応じて、研究を進める。
事前・事後学習課題	充分時間をかけ指示された予習、復習をすること。
評価基準	授業への参加度(発言など)と発表。 参加度60%、発表40%
教材等	適宜指示する。
備考	発表については終了後コメントする。

科目名	アジア言語文化研究総合演習Ⅱ	科目名(英文)	Seminar on Asian Languages and Cultures II
配当年次	2年	単位数	2
学期(開講期)	後期	授業担当者	門脇 薫

授業(指導)概要・目的	総合演習Ⅰをうけて、各自が設定した課題についての調査・研究を継続し、討論・発表等を通じて、より次元の高い研究技法の習得と研究能力の向上に努める。
到達目標	修士論文作成のための下準備。
授業方法と留意点	各指導教員の指示に従う。
授業(指導)計画	各指導教員の指示に従う。
事前・事後学習課題	【事前】 資料収集・論文作成など各自で必要な作業を行う。 【事後】 指導教員に指摘された箇所を検討し、修正する。
評価基準	各指導教員の指示に従う。
教材等	各指導教員の指示による。
備考	【指導担当者】 岩間 香、小川 豊生、瀬戸 宏、山口 真佐夫、門脇 薫

科目名	アジア言語文化研究総合演習Ⅱ	科目名(英文)	Seminar on Asian Languages and Cultures II
配当年次	2年	単位数	2
学期(開講期)	後期	授業担当者	浅野 英一

授業(指導)概要・目的	入学当初に提出した各自の研究テーマと研究計画を踏まえ、各指導教員の指導のもとに研究倫理のあり方を理解し、各自が研究資料の調査・収集等の予備的作業を行ない、討論・発表を通じて、研究遂行に必要な諸技能を修得し、修士論文を作成する。
到達目標	修士論文作成に向けての調査・資料収集を行う。
授業方法と留意点	受講者は調査及び考察した内容について発表する。 それについて教員との意見交換を通して研究を進める。
授業(指導)計画	修士論文のテーマに沿って、調査・資料収集を進める。
事前・事後学習課題	取り組むべき作業を進める。 事前・事後学習時間60h
評価基準	研究への取り組み(100%)
教材等	
備考	

科目名	アジア言語文化研究総合演習Ⅱ	科目名 (英文)	Seminar on Asian Languages and Cultures II
配当年次	2年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	上田 達

授業 (指導) 概要・目的	修士論文作成のための指導を行う。受講者の関心に基づいて研究主題を設定した上で、関連する文献資料を収集して講読に努める。
到達目標	調査研究を進める上で必要な技法を修得することを目標とする。
授業方法と留意点	受講者には毎回課題を出すので、意欲的に取り組むことが求められる。
授業 (指導) 計画	第1回 オリエンテーション 第2回～第14回 文献講読、資料分析、ディスカッション 第15回 まとめ
事前・事後学習課題	受講者の関心を開いた上で、講読する文献 (和文、英文) を決定する。受講者は毎回の授業で、一定分量の指定文献を読んできた上で、その内容についての報告を求める。
評価基準	毎回の授業課題への取り組み (20%) および期末に課す最終レポート (80%) によって評価する。
教材等	初回授業時に指示する。
備考	

科目名	アジア言語文化研究総合演習Ⅱ	科目名 (英文)	Seminar on Asian Languages and Cultures II
配当年次	2年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	橋本 正俊

授業 (指導) 概要・目的	入学当初に提出した各自の研究テーマと研究計画を踏まえ、各指導教員の指導のもとに研究倫理のあり方を理解し、各自が研究資料の調査・収集等の予備的作業を行ない、討論・発表を通じて、研究遂行に必要な諸技能を修得し、修士論文を作成する。
到達目標	修士論文作成に向けての調査・資料収集を行う。
授業方法と留意点	受講者は調査及び考察した内容について発表する。 それについて教員との意見交換を通して研究を進める。
授業 (指導) 計画	修士論文のテーマに沿って、調査・資料収集を進める。
事前・事後学習課題	取り組むべき作業を進める。 事前・事後学習時間 60h
評価基準	研究への取り組み (100%)
教材等	
備考	

科目名	アジア言語文化研究総合演習Ⅱ	科目名 (英文)	Seminar on Asian Languages and Cultures II
配当年次	2年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	赤澤 春彦

授業 (指導) 概要・目的	入学当初に提出した各自の研究テーマと研究計画を踏まえ、各指導教員の指導のもとに研究倫理のあり方を理解し、各自が研究資料の調査・収集等の予備的作業を行ない、討論・発表を通じて、研究遂行に必要な諸技能を修得し、修士論文を作成する。
到達目標	修士論文の作成に向けた準備を行う。
授業方法と留意点	受講者は研究内容をレジュメにまとめ発表する。 質疑応答を行い研究を深める。
授業 (指導) 計画	テーマにかかると資料を収集し、解読、考察を進める。
事前・事後学習課題	事前・事後学習時間 60h を目安とし、継続的に研究を進める。
評価基準	報告と年度末レポート
教材等	
備考	

科目名	アジア言語文化研究総合演習Ⅲ	科目名 (英文)	Seminar on Asian Languages and Cultures III
配当年次	2年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	山口 真佐夫

授業 (指導) 概要・目的	研究資料の分析を行ない、修士論文の執筆を開始する。本授業では研究倫理についても説明を行う。
到達目標	研究資料の基本的な分析を終え、修士論文の執筆を開始。
授業方法と留意点	発表、質疑応答、意見交換を行う。
授業 (指導) 計画	資料の分析を行う。修士論文の執筆指導を行う。
事前・事後学習課題	充分時間をかけ指示された予習、復習をすること。
評価基準	授業への参加度 (発言など) と発表。 参加度 60%、発表 40%
教材等	適宜指示する。
備考	発表については終了後コメントする。

科目名	アジア言語文化研究総合演習Ⅲ	科目名 (英文)	Seminar on Asian Languages and Cultures III
配当年次	2年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	門脇 薫

授業 (指導) 概要・目的	総合演習Ⅰ・Ⅱをうけて、各自が設定した課題についての調査・研究を深め、各指導教員の指導のもとに、修士論文を作成する。
到達目標	修士論文の作成。
授業方法と留意点	各指導教員の指示に従う。
授業 (指導) 計画	各指導教員の指示に従う。
事前・事後学習課題	【事前】 資料収集・論文作成など各自に必要な作業を行う。 【事後】 指導教員に指摘された箇所を検討し、修正する。
評価基準	各指導教員の指示に従う。
教材等	各指導教員の指示による。
備考	【指導担当者】 岩間 香、小川 豊生、瀬戸 宏、山口 真佐夫、門脇 薫

科目名	アジア言語文化研究総合演習Ⅲ	科目名 (英文)	Seminar on Asian Languages and Cultures III
配当年次	2年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	浅野 英一

授業 (指導) 概要・目的	入学当初に提出した各自の研究テーマと研究計画を踏まえ、各指導教員の指導のもとに研究倫理のあり方を理解し、各自が研究資料の調査・収集等の予備的作業を行ない、討論・発表を通じて、研究遂行に必要な諸技能を修得し、修士論文を作成する。
到達目標	修士論文作成に向けての調査・資料収集を行い、論文執筆を進める。
授業方法と留意点	受講者は調査及び考察した内容について発表する。 それについて教員との意見交換を通して研究を進める。
授業 (指導) 計画	修士論文のテーマに沿って、調査・資料収集を進め、論文を執筆する。
事前・事後学習課題	取り組むべき作業を進める。 事前・事後学習時間 60h
評価基準	研究への取り組み (100%)
教材等	
備考	

科目名	アジア言語文化研究総合演習Ⅲ	科目名 (英文)	Seminar on Asian Languages and Cultures III
配当年次	2年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	上田 達

授業 (指導) 概要・目的	修士論文作成のための指導を行う。受講者の関心に基づいて研究主題を設定した上で、関連する文献資料を収集して講読に努める。
到達目標	調査研究を進める上で必要な技法を修得することを目標とする。
授業方法と留意点	受講者には毎回課題を出すので、意欲的に取り組むことが求められる。
授業 (指導) 計画	第1回 オリエンテーション 第2回～第14回 文献講読、資料分析、ディスカッション 第15回 まとめ
事前・事後学習課題	受講者の関心を聞いた上で、講読する文献 (和文、英文) を決定する。受講者は毎回の授業で、一定分量の指定文献を読んできた上で、その内容についての報告を求める。
評価基準	毎回の授業課題への取り組み (20%) および期末に課す最終レポート (80%) によって評価する。
教材等	初回授業時に指示する。
備考	

科目名	アジア言語文化研究総合演習Ⅲ	科目名 (英文)	Seminar on Asian Languages and Cultures III
配当年次	2年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	橋本 正俊

授業 (指導) 概要・目的	入学当初に提出した各自の研究テーマと研究計画を踏まえ、各指導教員の指導のもとに研究倫理のあり方を理解し、各自が研究資料の調査・収集等の予備的作業を行ない、討論・発表を通じて、研究遂行に必要な諸技能を修得し、修士論文を作成する。
到達目標	修士論文作成に向けての調査・資料収集を行い、論文執筆を進める。
授業方法と留意点	受講者は調査及び考察した内容について発表する。 それについて教員との意見交換を通して研究を進める。
授業 (指導) 計画	修士論文のテーマに沿って、調査・資料収集を進め、論文を執筆する。
事前・事後学習課題	取り組むべき作業を進める。 事前・事後学習時間 60h
評価基準	研究への取り組み (100%)
教材等	
備考	

科目名	アジア言語文化研究総合演習Ⅲ	科目名 (英文)	Seminar on Asian Languages and Cultures III
配当年次	2年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	赤澤 春彦

授業 (指導) 概要・目的	入学当初に提出した各自の研究テーマと研究計画を踏まえ、各指導教員の指導のもとに研究倫理のあり方を理解し、各自が研究資料の調査・収集等の予備的作業を行ない、討論・発表を通じて、研究遂行に必要な諸技能を修得し、修士論文を作成する。		
到達目標	修士論文の作成に向けた準備を行う。		
授業方法と留意点	受講者は研究内容をレジュメにまとめ発表する。 質疑応答を行い研究を深める。		
授業 (指導) 計画	テーマにかかる資料を収集し、解説、考察を進める。		
事前・事後学習課題	事前・事後学習時間 60h を目安とし、継続的に研究を進める。		
評価基準	報告と年度末レポート		
教材等			
備考			

科目名	アジア言語文化研究総合演習Ⅳ	科目名 (英文)	Seminar on Asian Languages and Cultures IV
配当年次	2年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	山口 真佐夫

授業 (指導) 概要・目的	修士論文の執筆指導を中心に、研究内容の充実を目指す。		
到達目標	修士論文の完成。		
授業方法と留意点	発表、質疑応答、意見交換を行う。修士論文の校正指導を行う。		
授業 (指導) 計画	修士論文の執筆指導を行う。		
事前・事後学習課題	充分時間をかけ指示された予習、復習をすること。		
評価基準	修士論文 100%		
教材等	適宜指示する。		
備考	修士論文の内容については逐次コメントをする。		

科目名	アジア言語文化研究総合演習Ⅳ	科目名 (英文)	Seminar on Asian Languages and Cultures IV
配当年次	2年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	門脇 薫

授業 (指導) 概要・目的	総合演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲにもとづき、各自が設定した課題についての集大成として、各指導教員の指導のもとに、修士論文を完成させる。		
到達目標	修士論文の完成。		
授業方法と留意点	各指導教員の指示に従う。		
授業 (指導) 計画	各指導教員の指示に従う。		
事前・事後学習課題	【事前】 資料収集・論文作成など各自で必要な作業を行う。 【事後】 指導教員に指摘された箇所を検討し、修正する。		
評価基準	各指導教員の指示に従う。		
教材等	各指導教員の指示による。		
備考	【指導担当者】 岩間 香、小川 豊生、瀬戸 宏、山口 真佐夫、門脇 薫		

科目名	アジア言語文化研究総合演習Ⅳ	科目名 (英文)	Seminar on Asian Languages and Cultures IV
配当年次	2年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	浅野 英一

授業 (指導) 概要・目的	入学当初に提出した各自の研究テーマと研究計画を踏まえ、各指導教員の指導のもとに研究倫理のあり方を理解し、各自が研究資料の調査・収集等の予備的作業を行ない、討論・発表を通じて、研究遂行に必要な諸技能を修得し、修士論文を完成させる。		
到達目標	修士論文を完成させる。		
授業方法と留意点	受講者は調査及び考察した内容について発表する。 それについて教員との意見交換を通して研究を進める。		
授業 (指導) 計画	修士論文のテーマに沿って、調査・資料収集を進め、論文を完成させる。		
事前・事後学習課題	取り組むべき作業を進める。 事前・事後学習時間 60h		
評価基準	研究への取り組み、修士論文の完成度 (100%)		
教材等			
備考			

科目名	アジア言語文化研究総合演習Ⅳ	科目名 (英文)	Seminar on Asian Languages and Cultures IV
配当年次	2年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	上田 達

授業 (指導) 概要・目的	修士論文作成のための指導を行う。受講者の関心に基づいて研究主題を設定した上で、関連する文献資料を収集して講読に努める。
到達目標	調査研究を進める上で必要な技法を修得することと修士論文の完成を目標とする。
授業方法と留意点	受講者には毎回課題を出すので、意欲的に取り組むことが求められる。
授業 (指導) 計画	第1回 オリエンテーション 第2回～第14回 文献講読、資料分析、ディスカッション、論文作成のための指導 第15回 まとめ
事前・事後学習課題	受講者の関心を聞いた上で、講読する文献 (和文、英文) を決定する。受講者は毎回の授業で、一定量の指定文献を読んできた上で、その内容についての報告を求める。修士論文の作成は、自主的な取り組みを促し、進捗状況については定期的に確認する。
評価基準	毎回の授業課題への取り組み (20%) および完成させた修士論文 (80%) によって評価する。
教材等	初回授業時に指示する。
備考	

科目名	アジア言語文化研究総合演習Ⅳ	科目名 (英文)	Seminar on Asian Languages and Cultures IV
配当年次	2年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	橋本 正俊

授業 (指導) 概要・目的	入学当初に提出した各自の研究テーマと研究計画を踏まえ、各指導教員の指導のもとに研究倫理のあり方を理解し、各自が研究資料の調査・収集等の予備的作業を行ない、討論・発表を通じて、研究遂行に必要な諸技能を修得し、修士論文を完成させる。
到達目標	修士論文を完成させる。
授業方法と留意点	受講者は調査及び考察した内容について発表する。 それについて教員との意見交換を通して研究を進める。
授業 (指導) 計画	修士論文のテーマに沿って、調査・資料収集を進め、論文を完成させる。
事前・事後学習課題	取り組むべき作業を進める。 事前・事後学習時間 60h
評価基準	研究への取り組み、修士論文の完成度 (100%)
教材等	
備考	

科目名	アジア言語文化研究総合演習Ⅳ	科目名 (英文)	Seminar on Asian Languages and Cultures IV
配当年次	2年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	赤澤 春彦

授業 (指導) 概要・目的	入学当初に提出した各自の研究テーマと研究計画を踏まえ、各指導教員の指導のもとに研究倫理のあり方を理解し、各自が研究資料の調査・収集等の予備的作業を行ない、討論・発表を通じて、研究遂行に必要な諸技能を修得し、修士論文を作成する。
到達目標	修士論文を執筆する。
授業方法と留意点	受講者は修士論文の執筆を進め、それに対して指導する。
授業 (指導) 計画	受講者は修士論文の執筆を進め、それに対して指導する。
事前・事後学習課題	事前・事後学習時間 60h を目安とし、継続的に論文を執筆する。
評価基準	修士論文
教材等	
備考	

科目名	上級英語 I	科目名 (英文)	Advanced English I
配当年次	1 年	単位数	1
学期 (開講期)	前期	授業担当者	鳥居 祐介

授業 (指導) 概要・目的	英語による研究資料や論文の読解、および論文執筆の実践演習を行う。
到達目標	英語による修士論文の作成に必要な英語力を養う。
授業方法と留意点	<ul style="list-style-type: none"> ・担当教員の指導可能な分野と、受講生の専攻分野やテーマが重なる英語文献を学期の序盤にリストアップし、英作文の指導やディスカッションを行いながら読み進める。学期終盤には小論文を作成する。 ・この授業の担当教員の専攻はアメリカ研究 (American Studies) であり、英語指導が可能な分野は主として北米地域研究、あるいは文化研究一般となる。受講を検討する学生は、自分の研究関心、専攻分野や研究テーマと教員の指導分野に関連があるかどうかを、あらかじめ相談して確認しておくこと。
授業 (指導) 計画	初回授業において、担当教員の指導可能な分野と受講生のニーズが合致する英語文献のリストアップを行い、リーディングリストを作成する。第二回以降は、リストに従ったリーディングと、リーディングに基づいたライティングの演習またはディスカッションを行う。学期末には小論文を作成し、提出する。リーディングリストは随時改定する。
事前・事後学習課題	<ul style="list-style-type: none"> ・毎回、指定のリーディングについての疑問やコメントを用意して授業に臨むこと。 ・リーディングに基づいた英作文等の与えられた課題をスケジュール通りに提出すること。
評価基準	平常評価 70% + 学期末に提出する小論文 30%
教材等	初回授業で選定する
備考	研究室は 7 号館 3 階

科目名	上級英語 I	科目名 (英文)	Advanced English II
配当年次	1 年	単位数	1
学期 (開講期)	前期	授業担当者	住吉 誠

授業 (指導) 概要・目的	専門的な文献や時事問題などの資料を読み解きながら、大学院生として必要な英会話力や討論力、英語による発表力、およびレポート作成に必要な英作文力の向上を目指す。専門的な語彙力の増進と、基本的な文章の作成とともに、各自の関心あるテーマにそって、レポートを作成し、発表を行う。
到達目標	英語で専門的なレベルの文献や資料を読み理解できるようになる。 英語を用いて専門的な内容の発表ができるようになる。 英語で専門的な内容の、まとまった文章を書けるようになる。
授業方法と留意点	なるべく英語を使用して授業を進めていくので、予習は必須である。しっかりと準備をして臨んでほしい。
授業 (指導) 計画	<ul style="list-style-type: none"> 第 1 回：オリエンテーション、今後の課題の確認など。 第 2 回～第 7 回目：英語文献の読解、内容についての英語による討論、レポートの作成など。 第 8 回目：英語による中間発表 第 9 回目～第 1 4 回：英語文献の読解、内容についての英語による討論、レポートの作成など。 第 1 5 回目：最終プレゼンテーション
事前・事後学習課題	<ul style="list-style-type: none"> 【事前】 文献の読み込み、発表の準備など 【事後】 指導者が指摘した問題点など改善し、扱ったトピックについてより高い理解を目指す。 <p>事前事後の資料の読み込み、プレゼンテーションの準備、レポートの作成などにかかる総時間数を 30 時間以上とする。</p>
評価基準	<ul style="list-style-type: none"> 中間発表 (30%) 最終プレゼンテーション (30%) 最終レポート (40%)
教材等	授業中に指示する。
備考	

科目名	上級英語 II	科目名 (英文)	Advanced English II
配当年次	1 年	単位数	1
学期 (開講期)	後期	授業担当者	鳥居 祐介

授業 (指導) 概要・目的	英語による研究資料や論文の読解、および論文執筆の実践演習を行う。
到達目標	英語による修士論文の作成に必要な英語力を養う。
授業方法と留意点	<ul style="list-style-type: none"> ・担当教員の指導可能な分野と、受講生の専攻分野やテーマが重なる英語文献を学期の序盤にリストアップし、英作文の指導やディスカッションを行いながら読み進める。学期終盤には小論文を作成する。 ・この授業の担当教員の専攻はアメリカ研究 (American Studies) であり、英語指導が可能な分野は主として北米地域研究、あるいは文化研究一般となる。受講を検討する学生は、自分の研究関心、専攻分野や研究テーマと教員の指導分野に関連があるかどうかを、あらかじめ相談して確認しておくこと。
授業 (指導) 計画	初回授業において、担当教員の指導可能な分野と受講生のニーズが合致する英語文献のリストアップを行い、リーディングリストを作成する。第二回以降は、リストに従ったリーディングと、リーディングに基づいたライティングの演習またはディスカッションを行う。学期末には小論文を作成し、提出する。リーディングリストは随時改定する。
事前・事後学習課題	<ul style="list-style-type: none"> ・毎回、指定のリーディングについての疑問やコメントを用意して授業に臨むこと。 ・リーディングに基づいた英作文等の与えられた課題をスケジュール通りに提出すること。
評価基準	平常評価 70% + 学期末に提出する小論文 30%
教材等	初回授業で選定する
備考	研究室は 7 号館 3 階

科目名	上級英語Ⅱ	科目名(英文)	Advanced English I
配当年次	1年	単位数	1
学期(開講期)	後期	授業担当者	住吉 誠

授業(指導)概要・目的	専門的な文献や時事問題などの資料を読み解きながら、大学院生として必要な英会話力や討論力、英語による発表力、およびレポート作成に必要な英作文力の向上を目指す。専門的な語彙力の増進と、基本的な文章の作成とともに、各自の関心あるテーマにそって、レポートを作成し、発表を行う。
到達目標	英語で専門的なレベルの文献や資料を読み理解できるようになる。 英語を用いて専門的な内容の発表ができるようになる。 英語で専門的な内容の、まとまった文章を書けるようになる。
授業方法と留意点	なるべく英語を使用して授業を進めていくので、予習は必須である。しっかりと準備をして臨んでほしい。
授業(指導)計画	第1回:オリエンテーション、今後の課題の確認など。 第2回-第7回:英語文献の読解、内容についての英語による討論、レポートの作成など。 第8回:英語による中間発表 第9回-第14回:英語文献の読解、内容についての英語による討論、レポートの作成など。 第15回:最終プレゼンテーション
事前・事後学習課題	【事前】 文献の読み込み、発表の準備など 【事後】 指導者が指摘した問題点など改善し、扱ったトピックについてより高い理解を目指す。 事前事後の資料の読み込み、プレゼンテーションの準備、レポートの作成などにかかる総時間を30時間以上とする。
評価基準	中間発表(30%) 最終プレゼンテーション(30%) 最終レポート(40%)
教材等	授業中に指示する。
備考	

科目名	上級中国語Ⅰ	科目名(英文)	Advanced Chinese I
配当年次	1年	単位数	1
学期(開講期)	前期	授業担当者	中西 正樹

授業(指導)概要・目的	この授業では自然な中国語対話の運用力とより深い中国語理解力の向上を目指す。講義の素材は新聞雑誌やウェブサイトなどから選び、文法、語彙、発音を詳細に吟味する。文法に関しては基本中国語文法の枠を超え微細な意味の違いに文法がどのように反映しているか、また新語、流行語の実例を考察する。話題はさまざまだが、その時しか価値のない内容は避けたい。
到達目標	中国の原書の読解力を身につけることを目指す。
授業方法と留意点	テキストを講読してテキストの内容をめぐって講義し、日本語による訳読をおこなう。受講生がネイティブである場合は、正しい日本語に翻訳する訓練を兼ねる。
授業(指導)計画	授業では現代中国をめぐってさまざまなことを講義し、2回1テーマで進む。次の話題を取り上げる予定: 1 キャンパス・ライン、2 中国人の家庭観、3 中国の食文化、4 生活観の変化、5 消費の新しい傾向、6 中国人のレジャー、7 職業選択観の変化、8 中国の経済発展、9 交通問題、10 住宅問題、11 人口問題、12 老人問題、13 交際と結婚、14, 15 中国の媒体。
事前・事後学習課題	各回の指定教材をあらかじめ読んで、内容を日本語に訳しておくこと。
評価基準	試験成績及び練習への参加。
教材等	私製教材やコピーを配布する。
備考	

科目名	上級中国語Ⅰ	科目名(英文)	Advanced Chinese I
配当年次	1年	単位数	1
学期(開講期)	前期	授業担当者	兪 鳴蒙

授業(指導)概要・目的	この授業では自然な中国語対話の運用力とより深い中国語理解力の向上を目指す。北京語言大学出版社の『このように読む(這樣閱讀)』と『漢語縦横』から教材を選び、文法、語彙を詳細に吟味する。また新語、流行語の実例を考察する。
到達目標	中国の原書の読解力を身につけることを目指す。
授業方法と留意点	テキストを講読し、日本語による訳読や翻訳も行う。
授業(指導)計画	前半は現代中国をめぐってさまざまなことを講義し、2回1テーマで進み、次のトピックを取り上げる予定: 1 結婚のあれこれ、2 睡眠の話、3 チベット、新疆、雲南、4 人口と環境。 後半は中国語の慣用句(3字句)を中心に講義する。次の表現を含むテキストを取り上げる予定: 1 「傷筋」など、2 「愛面子」など、3 「打圓場」など、4 「刀子嘴」など、5 「頂梁柱」など、6 「和稀泥」。
事前・事後学習課題	語学力の向上には予習・復習は欠かせない。毎回指示された予習を行った上で授業に出ること。また、授業内容についての復習を怠らないこと。事前・事後に各60分の学修を要する。
評価基準	平常点を含め、総合的に判断する。
教材等	教材は配布する。参考書:『上級中国語』(趙玲華、ベレ出版)。その他、適宜指示する。
備考	

科目名	上級中国語Ⅱ	科目名(英文)	Advanced Chinese II
配当年次	1年	単位数	1
学期(開講期)	後期	授業担当者	中西 正樹

授業(指導)概要・目的	この授業では自然な中国語対話の運用力とより深い中国語理解力の向上を目指す。講義の素材は新聞雑誌やウェブサイトなどから選び、文法、語彙、発音を詳細に吟味する。文法に関しては基本中国語文法の枠を超え微細な意味の違いに文法がどのように反映しているか、また新生語、流行語の実例を考察する。話題はさまざまだが、その時しか価値のない内容は避けたい。
到達目標	中国の原書の読解力を身につけることを目指す。
授業方法と留意点	テキストを講読してテキストの内容をめぐって講義し、日本語による訳読をおこなう。
授業(指導)計画	授業では現代中国をめぐってさまざまなことを講義し、2回1テーマで進む。次の話題を取り上げる予定：1 キャンパス・ライン、2 中国人の家庭観念、3 中国の食文化、4 生活観の変化、5 消費の新しい傾向、6 中国人のレジャー、7 職業選択観の変化、8 中国の経済発展、9 交通問題、10 住宅問題、11 人口問題、12 老人問題、13 交際と結婚、14, 15 中国の媒体。
事前・事後学習課題	各回の指定教材をあらかじめ読んだうえ、内容を日本語に訳しておくこと。
評価基準	試験成績及び練習への参加。
教材等	私製教材やコピーを配布する。
備考	

科目名	上級中国語Ⅱ	科目名(英文)	Advanced Chinese II
配当年次	1年	単位数	1
学期(開講期)	後期	授業担当者	兪 鳴蒙

授業(指導)概要・目的	この授業では自然な中国語対話の運用力とより深い中国語理解力の向上を目指す。北京語言大学出版社の『漢語縦横』から教材を選び、文法、語彙を詳細に吟味する。また新語、流行語の実例を考察する。
到達目標	中国の原書の読解力を身につけることを目指す。
授業方法と留意点	テキストを講読し、日本語による訳読や翻訳も行う。
授業(指導)計画	中国語の慣用句(3字句)を中心に講義する。次の表現を含むテキストを取り上げる予定：1 「拉下臉」など、2 「滿堂灌」など、3 「手頭緊」など、4 「画等号」など、5 「開夜車」など、6 「發洋財」など、7 「砲筒子」など、8 「唱高調」など、9 「占便宜」など、10 「出風頭」など、11 「露一手」など、12 「百宝箱」など、13 「避風港」など、14 「小算盤」など。
事前・事後学習課題	語学力の向上には予習・復習は欠かせない。毎回指示された予習を行った上で授業に出ること。また、授業内容についての復習を怠らないこと。事前・事後に各1時間の学修時間を要する。
評価基準	平常点を含め、総合的に判断する。
教材等	書籍名『上級中国語』(著者：趙玲華、出版社：ベレ出版)
備考	

科目名	上級スペイン語Ⅰ	科目名(英文)	Advanced Spanish I
配当年次	1年	単位数	1
学期(開講期)	前期	授業担当者	北條 ゆかり

授業(指導)概要・目的	スペイン語で書かれた論文を読み、論理の流れ、論証の仕方を学びつつ、学術論文に特有の言い回しにも慣れるよう指導する。
到達目標	専門的な学術論文を読み解けるようになる。
授業方法と留意点	一文ずつ細かく読み、ニュアンスの違いをつかむとともに、パラグラフごと、章ごと、全体の把握ができるようにする。
授業(指導)計画	受講生の関心にしたがい、読むべき論文を探す方法の紹介から始める。 前期はとにかく詳細な読みに徹する。
事前・事後学習課題	進む範囲を決めておくので、その部分に関しては訳すだけでなく、何を聞かれても自分の意見が言えるようにしておく。
評価基準	授業への参加度およびスペイン語と日本語両言語での文章構成の精度をもとに総合的に評価する。
教材等	受講生の研究テーマに即して選定する。
備考	事前事後学修に要する総時間数は約60時間を目安とする。

科目名	上級スペイン語Ⅱ	科目名(英文)	Advanced Spanish II
配当年次	1年	単位数	1
学期(開講期)	後期	授業担当者	北條 ゆかり

授業(指導)概要・目的	スペイン語で書かれた論文を読み、論理の流れ、論証の仕方を学びつつ、学術論文に特有の言い回しにも慣れるよう指導する。
到達目標	専門的な学術論文を読み解けるようになる。
授業方法と留意点	一文ずつ細かく読み、ニュアンスの違いをつかむとともに、パラグラフごと、章ごと、全体の把握ができるようにする。
授業(指導)計画	受講生の関心にしたがい、読むべき論文を探す方法の紹介から始める。 後期は詳細な読みに加え、全体を見回せる目も養う。
事前・事後学習課題	進む範囲を決めておくので、その部分に関しては訳すだけでなく、何を聞かれても自分の意見が言えるようにしておく。
評価基準	授業への参加度およびスペイン語と日本語両言語での文章構成の精度をもとに総合的に評価する。
教材等	受講生の研究テーマに即して選定する。
備考	事前・事後学修に要する総時間数は約60時間を目安とする。

科目名	上級インドネシア・マレー語 I	科目名 (英文)	Advanced Indonesian and Malay I
配当年次	1 年	単位数	1
学期 (開講期)	前期	授業担当者	浦野 崇央

授業 (指導) 概要・目的	インドネシア、マレーシア、ブルネイ、シンガポール、東ティモール等で使われているインドネシア・マレー語は、国語・公用語として用いている人口が中国語、スペイン語、英語について世界第四位である。この授業ではインドネシア・マレー語の基本を身につけた上で、高度な運用ができることを目指す。
到達目標	インドネシア・マレー語の基本を踏まえた上で、高度な運用が身につく。
授業方法と留意点	毎回プリントを配布するので、次回までに予習をこなしておくこと。 毎回の授業には辞書を必ず携行すること。
授業 (指導) 計画	まず、インドネシア語の基本文法、発音、綴り等の基本を身につける。さらに講読を通して高度な読解力を習得する。
事前・事後学習課題	語学力の向上には予習・復習は欠かせない。毎回指示された予習を行った上で授業に出席すること。また、授業内容についての復習を怠らないこと。
評価基準	毎週の課題の取り組み姿勢 100%
教材等	プリントを配布する。
備考	

科目名	上級インドネシア・マレー語 I	科目名 (英文)	Advanced Indonesian and Malay I
配当年次	1 年	単位数	1
学期 (開講期)	前期	授業担当者	上田 達

授業 (指導) 概要・目的	インドネシア、マレーシア、ブルネイ、シンガポール、東ティモール等で使われているインドネシア・マレー語は、国語・公用語として用いている人口が中国語、スペイン語、英語について世界第四位である。この授業ではインドネシア・マレー語の基本を身につけた上で、高度な運用ができることを目指す。
到達目標	インドネシア・マレー語の基本を踏まえた上で、高度な運用が身につく。
授業方法と留意点	特にマレー語で書かれた教材を用いて、講読力を身につけるように指導する。
授業 (指導) 計画	先ずインドネシア・マレー語の基本文法、発音、綴り等の基本を身につける。さらに講読を通して高度な読解力を習得する。
事前・事後学習課題	語学力の向上には予習・復習は欠かせない。毎回指示された予習を行った上で授業に出ること。また、授業内容についての復習を怠らないこと。
評価基準	課題や授業への取り組みなど (40%) と、二度に分けて行う論述試験 (60%) から総合的に判断する。
教材等	適宜指示する。
備考	

科目名	上級インドネシア・マレー語 II	科目名 (英文)	Advanced Indonesian and Malay II
配当年次	1 年	単位数	1
学期 (開講期)	後期	授業担当者	浦野 崇央

授業 (指導) 概要・目的	インドネシア、マレーシア、ブルネイ、シンガポール、東ティモール等で使われているインドネシア・マレー語は、国語・公用語として用いている人口が中国語、スペイン語、英語について世界第四位である。この授業ではインドネシア語の高度で実践的な運用ができることを目指す。
到達目標	インドネシア語の原書の講読を行い、論文の作成が可能になるようにする。
授業方法と留意点	インドネシア語原書の講読を行い、論文独自の文体をマスターする。 毎回の授業には辞書を必ず携行すること。
授業 (指導) 計画	インドネシア語の原書講読を行う。
事前・事後学習課題	語学力の向上には予習・復習は欠かせない。毎回指示された予習を行った上で授業に出ること。また、授業内容についての復習を怠らないこと。
評価基準	毎週の課題等の積極的な取り組み姿勢 100%
教材等	プリントを配布する。
備考	

科目名	上級インドネシア・マレー語Ⅱ	科目名(英文)	Advanced Indonesian and Malay II
配当年次	1年	単位数	1
学期(開講期)	後期	授業担当者	上田 達

授業(指導)概要・目的	インドネシア、マレーシア、ブルネイ、シンガポール、東ティモール等で使われているインドネシア・マレー語は、国語・公用語として用いている人口が中国語、スペイン語、英語について世界第四位である。この授業ではインドネシア・マレー語の高度で実際の運用ができることを目指す。
到達目標	インドネシア・マレー語の原書の講読、論文の作成、プレゼンテーション能力を習得できる。
授業方法と留意点	マレー語で書かれた文献の講読を行い、さらに論文の作成を行う。講読、論文作成で養った能力をもとにプレゼンテーションを行う。
授業(指導)計画	インドネシア・マレー語の原書の講読を行う。論文作成の基本を指導し、実際に論文を作成する。テーマを決め、プレゼンテーションを行う。
事前・事後学習課題	語学力の向上には予習・復習は欠かせない。毎回指示された予習を行った上で授業に出ること。また、授業内容についての復習を怠らないこと。
評価基準	平常点を含め、総合的に判断する。
教材等	適宜指示する。
備考	

科目名	国際政治特論Ⅰ	科目名(英文)	Topics in International Politics I
配当年次	1年	単位数	2
学期(開講期)	前期	授業担当者	田中 悟

授業(指導)概要・目的	「私たち」として、「他者」とは、どのような存在であるのだろうか。私たちは、「私たちの国」の外側で暮らす「彼ら」と、どのように向き合うことができるのだろうか。本講義は、最も近い隣国としての韓国を導入事例として取り上げ、「他者」について国際政治の観点から考えるためのきっかけを提供する。
到達目標	国際政治(学)についての認識視座を獲得するとともに、先達の議論を踏まえつつ、自らの関心に沿った研究テーマを設定することを旨とする。
授業方法と留意点	講義の導入部では教員から話題の提供を行なうが、その後は自らの関心に基づいて文献資料をピックアップし、個人報告を行なう。この個人報告が、成績評価のための必要条件となる。
授業(指導)計画	<p>■導入部では、以下のテーマに基づいて導入講義を行なう。</p> <p>(1) 朝鮮半島を見る見方 朝鮮半島に対する自らの見方について、改めて考えてみる。</p> <p>(2) 現代韓国社会の理解 現代韓国を理解するための視座について考えていく。</p> <p>(3) 韓国現代史の理解 韓国の現代史についていかに理解していくか。一つの叙述を追いながら考えていく。</p> <p>■その後、次のような形式で個人報告を進めていく。</p> <p>(1) 文献紹介と書評 出席者が各人の関心に基づいて選択した文献について、内容紹介および書評を行なって、全員での議論を通して理解を深める。</p> <p>(2) 関心を研究テーマに 本講義で学んだことを自らの興味と関連づけつつ、各人の研究関心からいかにして研究テーマを設定するか、を考えていく。</p>
事前・事後学習課題	<p>〔事前学習〕指定された文献については講義前に目を通し、要点・疑問点についてはメモにまとめておく。</p> <p>〔事後学習〕授業内容を自らの研究計画に反映させ、恒常的にブラッシュアップを進める。</p> <p>本講義における学習時間の総計は、60時間を目安とする。</p>
評価基準	<p>【成績評価の方法】</p> <p>講義への参加状況および個人報告をもとに、総合的に評価する。</p>
教材等	
備考	

科目名	国際政治特論Ⅱ	科目名 (英文)	Topics in International Politics II
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	田中 悟

授業 (指導) 概要・目的	「私たち」にとって、「他者」とは、どのような存在であるのだろうか。私たちは、「私たちの国」の外側で暮らす「彼ら」と、どのように向き合うことができるのだろうか。本講義は、最も近い隣国としての韓国を導入事例として取り上げ、「他者」について国際政治の観点から考えるためのきっかけを提供する。
到達目標	国際政治 (学) についての認識視座を獲得するとともに、先達の議論を踏まえつつ、自らの関心に沿った研究テーマを設定することを旨とする。
授業方法と留意点	講義の導入部では教員から話題の提供を行なうが、その後は自らの関心に基づいて文献資料をピックアップし、個人報告を行なう。この個人報告が、成績評価のための必要条件となる。
授業 (指導) 計画	<p>■導入部では、以下のテーマに基づいて導入講義を行なう。</p> <p>(1) 朝鮮半島を見る見方 朝鮮半島に対する自らの見方について、改めて考えてみる。</p> <p>(2) 現代韓国社会の理解 現代韓国を理解するための視座について考えていく。</p> <p>(3) 韓国現代史の理解 韓国の現代史についていかに理解していくか。一つの叙述を追いながら考えていく。</p> <p>■その後、次のような形式で個人報告を進めていく。</p> <p>(1) 文献紹介と書評 出席者が各人の関心に基づいて選択した文献について、内容紹介および書評を行なって、全員での議論を通して理解を深める。</p> <p>(2) 関心を研究テーマに 本講義で学んだことを自らの興味と関連づけつつ、各人の研究関心からいかにして研究テーマを設定するか、を考えていく。</p>
事前・事後学習課題	<p>[事前学習] 指定された文献については講義前に目を通し、要点・疑問点についてはメモにまとめておく。</p> <p>[事後学習] 授業内容を自らの研究計画に反映させ、恒常的にブラッシュアップを進める。</p> <p>本講義における学習時間の総計は、60時間を目安とする。</p>
評価基準	【成績評価の方法】 講義への参加状況および個人報告をもとに、総合的に評価する。
教材等	
備考	

科目名	国際経済特論Ⅰ	科目名 (英文)	Topics in International Economy I
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	杉本 篤信

授業 (指導) 概要・目的	外国為替市場取引の仕組みを理解し、為替レートの決定理論を理解することである。そしてマクロ的な政策の効果は、マクロ経済学のモデルにおいて説明される。さらに国際金融市場の現状と役割について説明する。
到達目標	貿易、国際金融、為替レートの現状とそれを分析するための理論を理解する。
授業方法と留意点	テキストに従った講義形式。必要に応じてプリントなどを配布。
授業 (指導) 計画	教材の内容の解説とディスカッション。
事前・事後学習課題	講義中に指示下教材の予習をしておくこと。適宜内容を理解度を確認するためレポートなどを提出してもらおう。
評価基準	講義中の発言、提出物で評価する。
教材等	講義中指定
備考	

科目名	国際経済特論Ⅱ	科目名 (英文)	Topics in International Economy II
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	杉本 篤信

授業 (指導) 概要・目的	外国為替市場取引の仕組みを理解し、為替レートの決定理論を理解することである。そしてマクロ的な政策の効果は、マクロ経済学のモデルにおいて説明される。さらに国際金融市場の現状と役割について説明する。また国際金融危機の理論も説明する。
到達目標	貿易、国際金融、為替レートの現状とそれを分析するための理論を理解する。
授業方法と留意点	テキストに従った講義形式。必要に応じてプリントなどを配布。
授業 (指導) 計画	教材の内容の解説とディスカッション。
事前・事後学習課題	講義中に指示下教材の予習をしておくこと。適宜内容を理解度を確認するためレポートなどを提出してもらおう。
評価基準	講義中の発言、提出物で評価する。
教材等	講義中指定
備考	

科目名	異文化理解 I	科目名 (英文)	Intercultural Communication I
配当年次	1 年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	林田 敏子

授業 (指導) 概要・目的	人はそれぞれ固有の文化に育まれて自己形成する。そのため見知らぬ文化に接触すると、驚愕、感嘆、憤怒、等々、さまざまな心理的反応を示すことになる。この講義では、異文化に対する理解と認識のありようを、異なる学問領域の視点に立って検討する。
到達目標	学問対象に対するアプローチの仕方を身につける。
授業方法と留意点	文献・資料の読解・調査・検討。
授業 (指導) 計画	「植民地支配と異文化接触」イギリスを中心に植民地支配における異文化接触のあり方について考える。人種的・宗教的・民族的「他者」との遭遇がもたらす葛藤をとおり、歴史学的視点から異文化を理解する糸口をさぐる。
事前・事後学習課題	【事前】 初回授業時に配布するテーマにもとづき、指定された文献を読んで授業にのぞむ。 【事後】 毎回の授業内容を小レポートにまとめる。
	総時間数：60 時間
評価基準	授業への取り組み (20%)、研究発表 (40%)、レポート (40%) で評価する。
教材等	授業中にプリントを配布する。
備考	研究発表に関するフィードバックは発表時、レポートに関するフィードバックは第 15 回目の授業のなかで実施する。

科目名	異文化理解 I	科目名 (英文)	Intercultural Communication I
配当年次	1 年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	山口 真佐夫

授業 (指導) 概要・目的	言語と社会をテーマにする。また、異文化接触についても考察する。言語と社会の関係を研究するための知識を深めることを目的とする。
到達目標	言語の理解に役立つ社会言語学の基礎の習得。
授業方法と留意点	社会言語学に基づいた分析の方法を説明するとともに、受講生が実際に分析を行うことによって、より理解できるようにする。
授業 (指導) 計画	様々な言語について概観し、社会言語学に基づいた分析を行う。
事前・事後学習課題	充分時間をかけ指示された予習、復習をすること。
評価基準	授業への参加度 (発言など) と発表。 参加度 60%、発表 40%
教材等	必要に応じて、プリントを用意する。
備考	発表については終了後コメントする。

科目名	異文化理解 I	科目名 (英文)	Intercultural Communication I
配当年次	1 年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	小川 豊生

授業 (指導) 概要・目的	人はそれぞれ固有の文化に育まれて自己形成する。そのため見知らぬ文化に接触すると、驚愕、感嘆、憤怒等々、さまざまな心理的反応を示すことになる。この講義では、異文化に対する理解と認識のありようを、異なる学問領域の視点に立って検討する。
到達目標	学問対象に対するアプローチの仕方を身につける。
授業方法と留意点	文献・資料の読解・調査・検討
授業 (指導) 計画	「西洋人から見た日本文化」というテーマで、西洋の人々が日本についていかなるイメージを抱き、日本文化をどのようにとらえてきたか、その系譜をたどりつつ、日本あるいは日本文化を、外部の眼差しをとおした「異文化」として研究する。
事前・事後学習課題	授業時に指示する。
評価基準	レポートによる。
教材等	授業時に指示する。
備考	

科目名	異文化理解 I	科目名 (英文)	Intercultural Communication I
配当年次	1 年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	岩間 香

授業 (指導) 概要・目的	18 世紀から 19 世紀にかけて日本美術と西洋美術はたがいに影響しあう関係であった。それぞれにとって何が魅力的で新鮮であったのかを分析する。画家と作品を紹介しつつ、背景や技法について解説する。日本と西洋の美術の影響関係を知ることにより、双方の文化の本質を知ることができる。
到達目標	日本とヨーロッパの美術表現の基本的な違いを理解する。
授業方法と留意点	講義は常時スライドや教材表示装置を使用する。必要に応じノートに書き留めてもらいたい。
授業 (指導) 計画	1～3 回 日本における西洋美術の受容 遠近法・陰影法 4～7 回 日本における西洋美術の受容 油絵 5～10 回 西洋における日本美術の受容 浮世絵 11 回～15 回 西洋における日本美術の受容 工芸品
事前・事後学習課題	事前：毎回、次の回の教材を渡すので、事前にその時代の歴史を調べておく。また取り上げる美術作品を WEB や本で見ておく。(毎回 90 分) 事後：講義に出てきた作品の画像を集め、ノートをまとめる。不明な点を調べる。
評価基準	レポート
教材等	そのつどプリントを渡す
備考	美術館・博物館で本物の美術と接することを勧めます。

科目名	異文化理解 I	科目名 (英文)	Intercultural Communication I
配当年次	1 年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	浦野 崇央

授業 (指導) 概要・目的	人はそれぞれ固有の文化に育まれて自己形成する。そのため見知らぬ文化に接触すると、驚愕、感嘆、憤怒等、さまざまな心理的反応を示すことになる。この講義では、異文化に対する理解と認識のありようを、検討する。
到達目標	学問対象に対するアプローチの方法を身につける。
授業方法と留意点	文献・資料の調査・読解・検討
授業 (指導) 計画	1、イントロダクション 2、異文化理解に求められる姿勢 3、異文化理解と言語習得 4、異文化理解とコミュニケーションギャップ 5、異文化理解と先入観 6、異文化理解とカルチャーショック 7～8、「異文化」をフィールドワークする 9～11、日本人の眼差し 12～14、外国人の眼差し 15、まとめ
事前・事後学習課題	【事前学習課題】 指定する文献 (日本語・インドネシア語・英語等) を熟読し、問題点を整理しておくこと。 【事後学習課題】 全講義終了後にレポートを課すので、講義内容をまとめておくこと。
評価基準	レポートの内容 (80%)、授業への取り組み姿勢 (20%)
教材等	適宜、プリントを配布する。
備考	

科目名	異文化理解 I	科目名 (英文)	Intercultural Communication I
配当年次	1 年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	中島 直嗣

授業 (指導) 概要・目的	テーマは、「言語と文化」。英語および英語圏の国や地域を研究対象とし、主に社会言語学の観点から言語と文化の関係を考察する。また、英語の各方言の変化とその背景にある歴史的・社会的事象を確認しながら、現状および今後の推移についても考えてみたい。
到達目標	社会言語学の学問的知識と、人文科学の研究の手法を習得することを目標とする。
授業方法と留意点	文献・資料の読解、調査に基づく議論、レポートの作成などを中心に行っていく。
授業 (指導) 計画	英語および英語圏の国や地域を研究対象とし、主に社会言語学の観点から言語と文化の関係を考察する。 ・前半は、文献や資料を読解しながら、その要点を理解し、問題点を提起できるようにする。 ・後半は、英語の各方言の変化とその背景にある歴史的・社会的事象を確認しながら議論を展開し、レポートが作成できるように指導していく。
事前・事後学習課題	【事前学習】 毎回、設定されたテーマについて、文献・資料をを読んで、その内容を把握しておくこと。 【事後学習】 毎回の授業内容に基づいて、図書館等でさらに調べながら、理解と考察を深めること。 事前・事後学習の総時間数は 30 時間程度を目安とする。
評価基準	発表や議論を中心とした授業への取り組み (50%)、レポート・課題 (50%) を合わせて評価する。
教材等	授業中に指示したり、プリントを配布したりする。
備考	研究発表に関するフィードバックはその都度、レポートに関するフィードバックは第 15 回目の授業時に行う。

科目名	異文化理解 I	科目名 (英文)	Intercultural Communication I
配当年次	1 年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	中西 正樹

授業 (指導) 概要・目的	漢字文化の広がり 中国の言語を記述するために作られた漢字はこれまで東アジアの文化にどのような影響を与え、またそれ自身はどのように変容してきたのだろうか。漢字との付き合いを見つめ直す作業を通して異文化理解とは何かを考える。
到達目標	中国における漢字の発明からその歴史の変遷、中国非漢民族における漢字の受容とその影響、日本・朝鮮・ベトナムなど漢字文化に大きな影響を受けた周辺国での事情など、漢字の時間的、地理的な広がりを理解する。
授業方法と留意点	漢字文化圏に関する基本資料を読みながら授業を進める。
授業 (指導) 計画	資料を閲読するほか、漢字ミュージアム、民族学博物館、泉屋博物館 (中国古代青銅器) などへ赴いて、漢字に関わる考古学的資料などをもとにレポートを作成する。授業は基本的にレポート作成の中間発表の形をとり、必要に応じてレジメやパワーポイントを使った発表を行う。
事前・事後学習課題	事前に資料を精読するとともに、発表のための資料を用意しておく。
評価基準	プレゼンやレポートの内容 (60%) および授業に取り組む積極性 (40%) をもとに評価する。
教材等	
備考	

科目名	異文化理解 I	科目名 (英文)	Intercultural Communication I
配当年次	1 年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	松田 早恵

授業 (指導) 概要・目的	映画や文学作品を通して、ことばや文化とアイデンティティについて探求する。人は様々な経験をし、複数の文化と折衝をしながらアイデンティティを変容させていく。社会階層の移動、価値観の衝突、アイデンティティの葛藤などを映画や文学作品を例に考える。
到達目標	ことばと文化とアイデンティティの様々な捉え方を学び、自分なりの解釈ができるようになることを目指す。また、今後の複文化社会での生き方を考察する。
授業方法と留意点	文献・資料の読み込み、映画鑑賞などのために授業外の学習時間確保が必要である。
授業 (指導) 計画	文学や映画に見る異文化とアイデンティティ 文化とは何か? という問いから始まり、様々な分野における文化の定義を調べる。と同時に、文化とことばとアイデンティティの関係を探り、最新の文化の捉え方を考察する。その後、文学や映画で文化とことばとアイデンティティがどのように扱われているのかを検証していく。
事前・事後学習課題	【事前】 初回授業時に配布するスケジュールにもとづき、指定された文献を読んで授業にのぞむ。 【事後】 毎回の授業内容を要約、あるいは小レポートにまとめる。
評価基準	毎週の課題 (20%)、発表 (40%)、レポート (40%) で評価する。
教材等	授業で指示する。
備考	

科目名	異文化理解 II	科目名 (英文)	Intercultural Communication II
配当年次	1 年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	林田 敏子

授業 (指導) 概要・目的	人はそれぞれ固有の文化に育まれて自己形成する。そのため見知らぬ文化に接触すると、驚愕、感嘆、憤怒、等々、さまざまな心理的反応を示すことになる。この講義では、異文化に対する理解と認識のありようを、異なる学問領域の視点に立って検討する。
到達目標	学問対象に対するアプローチの仕方身につける。
授業方法と留意点	文献・資料の読解・調査・検討
授業 (指導) 計画	「イギリスにおける移民問題」 国内に複数の移民コミュニティを抱えるイギリスを例に、異文化接触の実態と諸問題について考察する。人種的・宗教的・民族的「他者」との遭遇がもたらす葛藤とおして、歴史学的視点から異文化を理解する糸口をさぐる。
事前・事後学習課題	【事前】 初回授業時に配布するテーマにもとづき、指定された文献を読んで授業にのぞむ。 【事後】 毎回の授業内容を小レポートにまとめる。
評価基準	総時間数：60 時間 授業への取り組み (20%)、研究発表 (40%)、レポート (40%) で評価する。
教材等	授業中にプリントを配布する。
備考	研究発表に関するフィードバックは発表時、レポートに関するフィードバックは第 15 回目の授業のなかで実施する。

科目名	異文化理解Ⅱ	科目名 (英文)	Intercultural Communication II
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	山口 真佐夫

授業 (指導) 概要・目的	言語と文化をテーマにする。また、異文化接触についても考察する。言語と文化の関係を研究するための知識を深めることを目的とする。
到達目標	言語の理解に役立つ言語人類学の基礎の習得。
授業方法と留意点	言語人類学に基づいた分析の方法を説明するとともに、受講生が実際に分析を行うことによって、より理解できるようにする。
授業 (指導) 計画	様々な言語について概観し、言語人類学に基づいた分析を行う。
事前・事後学習課題	充分時間をかけ指示された予習、復習をすること。
評価基準	授業への参加度 (発言など) と発表。 参加度 60%、発表 40%
教材等	必要に応じて、プリントを用意する。
備考	発表については終了後コメントする。

科目名	異文化理解Ⅱ	科目名 (英文)	Intercultural Communication II
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	小川 豊生

授業 (指導) 概要・目的	人はそれぞれ固有の文化に育まれて自己形成する。そのため見知らぬ文化に接触すると、驚愕、感嘆、憤怒等々、さまざまな心理的反応を示すことになる。この講義では、異文化に対する理解と認識のありようを、異なる学問領域の視点に立って検討する。
到達目標	学問対象に対するアプローチの仕方を身につける。
授業方法と留意点	文献・資料の読解・調査・検討。
授業 (指導) 計画	「西洋人から見た日本文化」というテーマで、西洋の人々が日本についていかなるイメージを抱き、日本文化をどのようにとらえてきたか、その系譜をたどりつつ、日本あるいは日本文化を、外部の眼差しをとおした「異文化」として研究する。
事前・事後学習課題	授業時に指示する。
評価基準	レポートによる。
教材等	授業時に指示する。
備考	

科目名	異文化理解Ⅱ	科目名 (英文)	Intercultural Communication II
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	岩間 香

授業 (指導) 概要・目的	明治以降、日本には西洋文化が流入し、芸術の世界にも大きな変革をもたらした。日本画や仏像彫刻などの伝統芸術に携わる人々がこれらにどう向き合ったのか。ヨーロッパに留学し、西洋芸術に取り組んだ人々が何を感じたのかを検証する。異文化との接触で新しい芸術が生み出される過程を理解する。
到達目標	日本美術の基本的な知識を修得するとともに、グローバル社会における文化に対する関心を高める。
授業方法と留意点	講義は常時スライドや教材表示装置を使用する。必要に応じノートに描き留めてもらいたい。
授業 (指導) 計画	第1回：明治維新と近代化 第2回～第13回：狩野芳崖／高村光雲／浅井忠／黒田清輝／荻原守衛／藤島武二／横山大観／竹内栖鳳／梅原龍三郎／レオナルド・フジタ 第14回～第15回：第二次世界大戦後の芸術家たち
事前・事後学習課題	事前：次の回の芸術家について調べておく。取り上げる美術作品をWEBや本で見ておく。(毎回90分) 事後：講義に出てきた作品の画像を集め、ノートをまとめる。不明な点を調べる。
評価基準	レポート
教材等	そのつどプリントを渡す
備考	美術館や博物館に足を運び、本物の美術に触れることを勧めます。

科目名	異文化理解Ⅱ	科目名(英文)	Intercultural Communication II
配当年次	1年	単位数	2
学期(開講期)	後期	授業担当者	浦野 崇央

授業(指導)概要・目的	人はそれぞれ固有の文化に育まれて自己形成する。そのため見知らぬ文化に接触すると、驚愕、感嘆、憤怒等、さまざまな心理的反応を示すことになる。この講義では、異文化に対する理解と認識のありようを、検討する。 具体的には、日本とインドネシアの関係性を事例として、異文化間交流の姿をさぐる。異文化との接触や交流は、人びとの経験に構造的変換をもたらす。その構造的変換がいかに明示化されるかについて社会学的視点を踏まえ考察し、異文化理解につなげていく。
到達目標	学問対象に対するアプローチの方法を身につける。
授業方法と留意点	文献・資料の調査・読解・検討
授業(指導)計画	1、イントロダクション 2、社会学的視点における異文化理解 3、インドネシア地域研究の眼差し 4～6、日本-インドネシア関係史 7～8、インドネシアから日本へ 8～9、日本からインドネシアへ 10～12、日本人とインドネシア人のコンフリクト 13～14、事例研究 15、まとめ
事前・事後学習課題	【事前学習課題】指定する文献(日本語・インドネシア語・英語等)を熟読し、問題点を整理しておくこと。 【事後学習課題】全講義終了後にレポートを課すので、講義内容をまとめておくこと。
評価基準	レポートの内容(80%)、授業への取り組み姿勢(20%)
教材等	適宜、プリントを配布する。
備考	

科目名	異文化理解Ⅱ	科目名(英文)	Intercultural Communication II
配当年次	1年	単位数	2
学期(開講期)	後期	授業担当者	中島 直嗣

授業(指導)概要・目的	テーマは、「言語と文化」。英語および英語圏の国や地域を研究対象とし、主に社会言語学の観点から言語と文化の関係を考察する。また、英語の各方言の変化とその背景にある歴史的・社会的事象を確認しながら、現状および今後の推移についても考えてみたい。
到達目標	社会言語学の学問的知識と、人文科学の研究の手法を習得することを目標とする。
授業方法と留意点	文献・資料の読解、調査に基づく議論、レポートの作成などを中心に行っていく。
授業(指導)計画	英語および英語圏の国や地域を研究対象とし、主に社会言語学の観点から言語と文化の関係を考察する。 ・前半は、文献や資料を読解しながら、その要点を理解し、問題点を提起できるようにする。 ・後半は、英語の各方言の変化とその背景にある歴史的・社会的事象を確認しながら議論を展開し、レポートが作成できるように指導していく。
事前・事後学習課題	【事前学習】 毎回、設定されたテーマについて、文献・資料を読んで、その内容を把握しておくこと。 【事後学習】 毎回の授業内容に基づいて、図書館等でさらに調べながら、理解と考察を深めること。
評価基準	発表や議論を中心とした授業への取り組み(50%)、レポート・課題(50%)を合わせて評価する。
教材等	授業中に指示したり、プリントを配布したりする。
備考	研究発表に関するフィードバックはその都度、レポートに関するフィードバックは第15回目の授業時に行う。

科目名	異文化理解Ⅱ	科目名(英文)	Intercultural Communication II
配当年次	1年	単位数	2
学期(開講期)	後期	授業担当者	中西 正樹

授業(指導)概要・目的	漢字文化の広がり 中国の言語を記述するために作られた漢字はこれまで東アジアの文化にどのような影響を与え、またそれ自身はどのように変容してきたのだろうか。漢字との付き合いを見つめ直す作業を通して異文化理解とは何かを考える。
到達目標	中国における漢字の発明からその歴史的変遷、中国非漢民族における漢字の受容とその影響、日本・朝鮮・ベトナムなど漢字文化に大きな影響を受けた周辺国での事情など、漢字の時間的、地理的な広がりを理解する。
授業方法と留意点	漢字文化圏に関する基本資料を読みながら授業を進める。
授業(指導)計画	資料を閲読するほか、漢字ミュージアム、民族学博物館、泉屋博物館(中国古代青銅器)などへ赴いて、漢字に関わる考古学的資料などをもとにレポートを作成する。授業は基本的にレポート作成の中間発表の形をとり、必要に応じてレジュメやパワーポイントを使った発表を行う。
事前・事後学習課題	事前に資料を精読するとともに、発表のための資料を用意しておく。
評価基準	プレゼンやレポートの内容(60%)および授業に取り組む積極性(40%)をもとに評価する。
教材等	
備考	

科目名	異文化理解Ⅱ	科目名 (英文)	Intercultural Communication II
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	松田 早恵

授業 (指導) 概要・目的	映画や文学作品を通して、ことばや文化とアイデンティティについて探求する。人は様々な経験をし、複数の文化と折衝をしながらアイデンティティを変容させていく。社会階層の移動、価値観の衝突、アイデンティティの葛藤などを映画や文学作品を例に考える。
到達目標	ことばと文化とアイデンティティの様々な捉え方を学び、自分なりの解釈ができるようになることを目指す。また、今後の複文化社会での生き方を考察する。
授業方法と留意点	文献・資料の読み込み、映画鑑賞などのために授業外の学習時間確保が必要である。
授業 (指導) 計画	文学や映画に見る異文化とアイデンティティ 文化とは何か?という問いから始まり、様々な分野における文化の定義を調べる。と同時に、文化とことばとアイデンティティの関係を探り、最新の文化の捉え方を考察する。その後、文学や映画で文化とことばとアイデンティティがどのように扱われているのかを検証していく。
事前・事後学習課題	【事前】初回授業時に配布するスケジュールにもとづき、指定された文献を読んで授業にのぞむ。 【事後】毎回の授業内容を要約、あるいは小レポートにまとめる。 総時間数：60時間
評価基準	毎週の課題 (20%)、発表 (40%)、レポート (40%) で評価する。
教材等	授業で指示する。
備考	

発行 2018年4月

常翔学園 摂南大学

寝屋川校地

〒572-8508

大阪府寝屋川市池田中町17番8号

電話(072)-839-9106 【教務課】

枚方校地

〒573-0101

大阪府枚方市長尾峠町45番1号

電話(072)-866-3100 【枚方事務室】

